



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	樺太郷土会の活動とその影響：新聞・雑誌による郷土研究の取り組み
Author(s)	鈴木, 仁; Suzuki, Jin
Citation	北方人文研究, 12, 19-47
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73537
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_12_Suzuki.pdf



樺太郷土会の活動とその影響 — 新聞・雑誌による郷土研究の取り組み —

鈴木 仁

(北海道大学大学院文学研究科博士後期課程)

要旨

本論は、日本領時代の樺太における郷土研究について、島内で発行された新聞・雑誌から、その形成と展開を考察したものである。

日本領樺太には大正期にパルプ・製紙工業が進出し、水産業に代わる基幹産業へと成長する。工場を中心とした市街地が拡大し、また、原材料を供給する林業により冬期間の労働が生まれたことで、移住民の定住を促進させた。

昭和期に入ると、内地での郷土研究・郷土教育の影響を受け、移住地であるこの地域を「郷土」として研究する取り組みが現れる。1930年に結成された樺太郷土会には、教職員、樺太庁の役人、新聞記者など、幅広い人脈が広がっている。その研究分野も、歴史、民族学、自然科学など樺太における様々な事象を対象にしており、研究成果は新聞や出版物で発表された。また、史跡保存、博物館の資料収集、図書館設立も企画し、樺太庁への運動も行っている。

樺太郷土会結成の契機には、樺太の有力紙『樺太日日新聞』の主筆菱沼右一による主導的役割があり、同紙は活動の広報媒体にもなっている。また樺太郷土会が活動した時期に、政府や樺太庁では、樺太を内地に編入し、自立した地方行政への転換が計画されたことも、住民の郷土意識が求められた背景に影響していると思われる。

会の活動は1932年にはなくなるが、参加した研究者は、個人や別の団体を結成し、研究活動が続ける。1930年に樺太郷土会により始められた様々な活動は、その後も公的な文化事業や個人の研究活動に影響している。

はじめに

郷土研究は、新渡戸稲造、柳田國男らにより農政学の観点から提唱され、民俗学や人文地理学を派生しながら、昭和4年(1929)の文部省による師範学校への郷土調査費補助をきっかけに、郷土研究・郷土教育活動が全国的に活発化する。同時期に、文部省の補助が適用されていない樺太においても、領内全域に販売網を持つ『樺太日日新聞』を媒体に、研究団体である樺太郷土会が組織されている。

この団体について、三木理史は日本における樺太論(樺太研究)の概観をまとめたなかで、「一九三〇年代になると樺太にも郷土研究の根づくようになり、その担い手の一人であった西鶴定嘉は、大泊中学教員時代に、樺太日日新聞主筆の菱沼右一らと樺太郷土会を組織して著作を著すようになった」と島内からの唯一の事例として取り上げ、西鶴定嘉の事績から「それらの地域観は、当時の郷土研究一般に通じる傾向として樺太限定観から基本的に出るものではなかった」と、その

影響は島内だけのものとしている¹⁾。三木の論点は、日本における樺太の地域観を検証するため、開発政策や地域研究の理論に注目しており、そのため、移住地樺太において郷土研究が展開された背景や、西鶴定嘉のように個人の研究活動が続けられた経緯については言及されていない。

樺太郷土会の著書『樺太の地名』で、共著者となった西鶴定嘉と葛西猛千代については、著作の復刻や研究業績がまとめられているが、著者の一人であり、樺太郷土会の中心人物であった『樺太日日新聞』の主筆菱沼右一と樺太郷土会全体の活動は明らかにされていない²⁾。そのため本稿では、日本領時代の樺太における郷土研究の発生、展開について、樺太郷土会を中心に、結成以前の『樺太日日新聞』関係者の活動や研究者の動向を含めて考察する。

なお本文、脚注では北緯50度以南の日本領樺太を「樺太」と表記し、『樺太日日新聞』は『樺日』と略す。また、資料との照合から年号を主とし、西暦を補足した（注では1945年以後の出版年を西暦のみ記載）。表は巻末にまとめた。

1 新聞記者による「郷土研究」

1.1 明治期・大正期

新聞の発行が盛んであった樺太において、創刊の経緯や発行部数から『樺日』は代表的な存在であった³⁾。『樺日』は領有直後に発行されていた三紙が、樺太庁の斡旋により合併し、明治41年に創刊された⁴⁾。そのため樺太庁とのつながりが深く、紙面に樺太庁の公報欄が設けられ「公布式掲載料」を受けているが、その論調は樺太庁の政策に迎合したものだけではなく、開発推進の立場から意見を具申する社説記事もある。

郷土研究との関係では、設立草創期の主筆である中院當有が、明治42年11月の退社後に樺太庁事務嘱託となり、「日本統治権到達の有無、並樺太施政調査」⁵⁾を担当し、明治45年（1912）、島内の発行物では最初の歴史書となる『樺太施政沿革』（維新以前・以後全二巻）を執筆している。

また、創刊直後の明治41年6月に『樺日』の文芸主任として招聘された西田源蔵は、「文壇」欄で「樺太風土美の愛すべきを鼓吹」し、論説では「殖民開発に関する論策」を執筆した⁶⁾。西田は同年12月に『樺日』を退社し、大泊町で『樺太時事』の編集長を務め、明治45年の帰郷の際に「樺太生活の記念」として、豊原町の若林書店より『樺太風土記』を出版している。同書「自序」には「樺

1) 三木理史『移住型植民地樺太の形成』（塙書房2012年、50頁）。著作の注に樺太郷土会の出版物『樺太の地名』が記載されている。

2) 西鶴定嘉については、池田裕子「樺太庁師範学校における樺太史教育」（『日本の教育史学会紀要』第52集、2009年）。葛西猛千代については、松本皎「翻刻 中川小十郎氏巡視随行記」（『蓑笠亭・愚庵・古道人研究』第7号、旧『立命館・中川小十郎研究会会報』第19号、2017年）。

3) 樺太郷土会が結成される昭和5年当時、新聞紙法認可の新聞だけでも日刊と隔日刊を合わせ21紙が発行され、北海道から『北海タイムス』『小樽新聞』も移入されていた。『樺日』は朝刊6頁で8,600部発行され、島内発行の新聞では最大の部数であった（『日本新聞年鑑 昭和6年版』昭和5年12月、現勢88頁）。

4) 村松輝太郎「思い出を語る 私の樺太渡航と新聞経営に乗り出すまで（下）」『樺太毎日新聞』昭和14年5月17日。函館市中央図書館蔵（資料番号1810863439）。樺太守備隊の「御用紙」であった『樺太新報』と、樺太民政署の「御用紙」であった『樺太日報』が、明治40年4月に開設された樺太庁に買上げられ、翌年2月に『樺太時事』と合併して、『樺太日日新聞』に改題された。

5) 『樺太施政沿革 維新以前』上篇例言。

6) 西田生「告別」『樺日』明治45年4月5日。

太島民が定住の念と養はんが為めには先づ愛土の心を養ふを要す」ことから、「自己の棲土に趣味」⁷⁾を持つことを目的に、自然や生活風景の他、先住民の生活文化や、山野天海（後述）の取材記事を参考にした幕末期の日本人の逸話で構成されており、樺太の地域性を取り入れた文芸作品の事例を示している。西田は青森県に帰郷後、『東奥日報』などの県内の新聞社に勤務しながら郷土史誌⁸⁾を編纂しており、樺太においても「郷土」認識を文芸や史話などの「趣味」から促そうとしていたであろう。

西田の退社後の『樺日』紙面で郷土の「趣味」の執筆を担っていたのは、西海岸の商業都市真岡町で、支社主任を務めていた山野天海（本名は乙助）であった。山野は領有直後の樺太に渡り、真岡町で海岸工事を専門とする土木会社を経営しており、工事中に幕末期の日本人の遺物を発掘したことから、地域の歴史に関心を持つ。明治41年6月の樺太日日新聞入社後⁹⁾も幕末期の日本人の遺物やアイヌ語の研究に取り組んでおり、幕末からロシア帝国領を通して樺太に居住していた瀬川太右衛門¹⁰⁾への聞き取りや真岡を拠点に北洋漁業を開発したデンビー商会など、領有以前の歴史を記録している。

山野の記事は、西海岸の現況を伝える情報とともに『樺日』紙面に掲載され、大正4年8月3日から翌大正5年3月9日にかけて「口碑に遺る樺太古跡譚」69回（79話）が連載されている。この連載は、「一遍の文士墨客が漫に物する雑録漫筆が遂に一種の権威となつて後の樺太史を編する人の累を為すのを恐れての故」と「史跡や史蹟を保存しやうとする篤志家」に向けて発表されており、島内での郷土研究を念頭に置いている¹¹⁾。

大正6年の山野の退社後、『樺日』紙面では、先住民や「残留露人」への取材記事はあるものの、樺太の歴史や文化を調査する記事は減少する。『樺日』主筆であった谷口英三郎が、退社後に出版した『樺太殖民政策』（大正3年、東京・拓殖新聞社）で、中近世の樺太統治や産業や政策などの歴史がまとめられた例はあるが、『樺日』紙面での郷土研究を促す記事はみられない。

1.2 菱沼右一の赴任

昭和4年（1929）8月、菱沼右一は、『樺日』社長沖島鎌三からの招聘に応じ、同紙の主筆として赴任する。菱沼右一は明治16年（1883）茨城県出身、早稲田大学英文科在学中に警視庁の通訳を勤め、報知新聞記者を経て国民新聞社に入社し、社会部記者として活躍、大正13年に社会部長、翌14年に参事・論壇委員となった¹²⁾。

7) 西田源蔵『樺太風土記』（若林書店、明治45年）「自序」

8) 帰郷後の西田源蔵の著作には『青森県誌 県史名勝旧蹟現況』（成田書店、大正15年）や『東津軽郡誌』（東津軽郡町村会、昭和4年）など。

9) 「三箇年の小史」『樺日』明治41年8月23日。

10) 瀬川太右衛門は天保3年に松前の船大工の家に生まれ、栖原家に奉公する。樺太に渡り、幕末・明治初期、ロシア帝国領時代を現地で過す。大正4年8月逝去。山野天海「在嶋七十年の樺太の最古老瀬川老人死亡す」『樺日』大正4年8月22日より。山野天海により『函館日日新聞』にも明治42年11月21日から12月11日まで「樺太に六十二年 瀬川老爺と語る」が連載されている。

11) 山野天海「口碑に遺る樺太古跡譚（一）はしがき」『樺日』大正4年8月3日。なおこの連載記事は戦後、著者の息子山野隼人が、当時の記事スクラップ帖から編集して、記事の一部を収録した『樺太史談』（北斗社、1971）を出版している。

12) 菱沼の経歴は、中央情報社での部下木村誠により菱沼の履歴書を基に書かれた「雑記帖菱沼さんの足跡」『樺連情報』（全国樺太連盟、1959年10月10日）に、『我村のために』（三生社、大正15年）の自序から

社会部記者時代は探偵記者の異名を持つ名物記者であり、徳富蘇峰は社員向けの演説のなかで、菱沼が情報収集に専念するため「自分は何処迄も泥探である」と自嘲することに「泥探と云ふのは泥棒と探偵と云ふ意味だと云ふ註釈を伺ひました。そう云ふ事を菱沼さん一人に専らにされる事は、私共の恥辱である」と、その貢献を評価している¹³⁾。

北方地域との関係では、ロシア革命史をまとめた長瀬鳳輔との共著『擾乱の露西亜 附宮廷の大悲劇』(国民新聞社、大正6年)の著作や、大正9年5月に尼港事件のため陸軍が結成した沿海洲居留民救援隊の司令部附従軍記者として派遣されている。大正13年には欧州特派員として派遣され、現地ではドイツやデンマークの農村に注目し、帰国後は東北の農村復興問題にも取り組んだ¹⁴⁾。

政治運動にも関係し、大正11年1月に長野県で開催された信濃黎明会による普選速進講演大会では、日本労働総同盟会長鈴木文治とともに国民新聞社会部次長の菱沼も招聘されている¹⁵⁾。昭和3年2月に行われた第一回普通選挙では、無所属で茨城県第三区から立候補するが落選している。

昭和4年1月5日に経営上の問題から徳富蘇峰が国民新聞社を去ると、菱沼も退社した。半年後に『樺日』の主筆に招かれた経緯は不明だが、国民新聞社での実績の他に、新任の縣忍¹⁶⁾ 樺太庁長官と旧知であることも関係しているであろう¹⁷⁾。退社の同年7月2日に浜口雄幸内閣(民政党)が成立し、9日に第10代樺太庁長官に就任した縣は、警察官僚の経験があり、長野県警察部長や警視庁勤務時代に、国民新聞社の社会部記者であった菱沼と面識があった。縣長官期の政府の樺太政策については、本稿3.1で後述するが、政府からの補助金に基づいた総合行政から、税収を基幹とし北海道に類似した地方行政への転換が図られる時期であり、菱沼が『樺日』紙面で「郷土」を提唱する背景ともいえる。

縣長官赴任の際、稚内から大泊へ向う連絡船亜庭丸には菱沼も乗船しており、二人は昭和4年7月12日に新任地樺太に上陸する。

この時、樺太は、領有当初の鯨漁に代表される水産業から、大正期に森林資源を利用するパルプ・製紙工業へと基幹産業が移り、林業による冬期間の労働や工場を中心とした市街地の拡大は、移民の定住を促進させ、昭和4年に住民人口は25万人を超えていた。

赴任直後に縣長官は、五十日間をかけて島内を巡視する。この巡視で縣長官は、「開拓の実状を

補足した。

- 13) 「徳富社長演説 大正十年一月七日」(和田守・有山輝雄編『徳富蘇峰・民友社関係資料集』(三一書房,1986年,278頁)。
- 14) 農村問題では前掲『我村のために』や『農業講座 J O H K 講演集』(日本放送協会東北支部,昭和5年)に「農村は何故に疲弊するか」を発表。
- 15) 『長野県史』第8巻,近代史料編社会3(長野県史刊行会,1984年,460頁)。
- 16) 縣忍は明治14年(1881)、静岡県生まれ。明治41年に東京帝国大学法科大学法律学科を卒業して内務省に入り、栃木県、北海道庁での勤務、長野県、兵庫県の警察部長、福井県内務部長、警視庁警務部長を務めた。大正11年からは山形県、鹿児島県、千葉県、群馬県の知事を歴任。昭和4年17月9日に樺太庁長官就任、昭和6年12月17日の退任後は、昭和7年に大阪府知事となり、在任中にゴースト事件が起きて寺内寿一第四師団長と対立する。昭和10年に府知事を退任。昭和14年に名古屋市長となり、任期中の昭和17年(1942)に逝去。
- 17) 歴代の『樺日』主筆を論じた山野井洋「沖島鎌三論 中村正次郎と藤井尚治と菱沼右一」『樺太』第6巻第10号(樺太社,昭和9年10月,65頁)には「菱沼も縣も昭和三年の落選組で、仲良く落ちてからの二人は、毎日暮を囲んで慰め合つた間柄だから、樺太へ来たのも、縣の推輓」であつたと推測されている。

視るに及んで、過去に於ける開発施設の上に、種々遺憾の点あること」を感じており、「従来中央の政府当局に於いて、樺太を冷遇し、樺太の開発に対し、必要な力を入れなかつた事に起因する」との印象を得ている。また、樺太庁の財源の柱であった森林資源が「近き将来に於いて一時自然消滅を免れない」ことから「冷凍地作物を主とせる栽培事業、及牧畜業、並に石炭、石油を目標」とした事業の計画的な開発を構想する¹⁸⁾。

縣長官の島内巡視には『樺日』主筆の菱沼も同行しており、巡視先から送られる菱沼の記事は、熱心に視察する縣長官とそれを歓迎する住民、豊富な石炭資源があることを伝えている。豊原町から西海岸真岡町の間にある内陸部の清水村では、それまでの豊原町近郊の「荒涼たる村や原のみを見てみた吾々の眼にはなんとも懐かしい感」が起り、「これなら、樺太もどうやら農業が立行かぬこともあるまいと云つた希望」を抱かせた。¹⁹⁾

しかし、港湾や鉄道敷設などの開発が進む西海岸に入ると、菱沼の視点は人々の住民意識に向けられる。それは、長官一行への地元住民からの陳情を、かつて内務大臣後藤新平の巡視に同行したときの印象と比較したもので、内地では「町の力で斯やってみたが、どうしてもこれ丈足らぬ、補助して欲しい」という陳情の仕方に対し、樺太では「此棧橋は此儘にして置けば今年一パイには駄目になつて終ふと、何だか其の責任は町民にはないと云ふ響きに聞こゆる」「大体に於て他力の分量が多い」ものに感じられた。そのため道路や港湾の竣工による「西海岸黄金時代の出現」を前に「住民の定着と自治的活動に対してもう一段の奮発を希ふて止まぬ」との課題を見出している²⁰⁾。

1.3 「文献欄」の設置

長官の巡視に同行した菱沼は、各地でその土地の地名の由来を住民に尋ねるが「此れはアイヌ語だそうだと云つて他人事のように答え」られ、「役場にも学校にも何の記録もなく」、入植当時の歴史は「口碑として伝はつて居るだけ」であった²¹⁾。

そのため豊原町の本社に戻った菱沼は、樺太の歴史調査に取り組むが、「樺太を研究せんとして最も不便を感じるものは樺太に関する文献の少なきこと」であり、わずかな資料も「明治の中葉に教育を受けた者にはどうにか読み得るかも知れぬが現代人には難解のものゝみ」であった²²⁾。

菱沼は樺太に関する資料を収集し、『樺日』紙面での掲載を企画する。昭和4年9月21日の『樺日』社説「樺太の文献」では、「我紙上の一部をさいて樺太文献欄を設置」して「此欄を基礎として纏て樺太史研究会 樺太風土研究会 樺太考古研究会を組織せんことを期待」し、「読者諸君と語る機会を作りたい」と呼びかけており、研究団体の設立も構想している。同月25日には紙面第1面に「文献欄」（昭和6年以降は「樺太の文献」）の連載が始まり、菱沼による「樺太の名称」と題した地名研究の連載記事が掲載された。後に地域史や間宮林蔵、岡本監輔、鈴木茶溪などの北方探検家や樺太駐在の記録も掲載され、元主筆谷口英三郎の『樺太殖民政策』から「樺太史」が転載された。また「文献欄」以外の紙面（主に第3面）にも、アイヌ語資料や先住民の「伝説」の再話も掲載され、山野天海の連載記事も再掲されている²³⁾（表1参照）。

18) 縣忍「今後の樺太開発策」『樺太』第1巻第3号（樺太社、昭和5年3月、9頁）。

19) 「西海岸の初旅（一）懐かしい山村の辻々」『樺日』昭和4年9月27日。

20) 「西海岸の黄金時代」『樺日』昭和4年8月29日。

21) 「社説 樺太文献欄設置」『樺日』昭和4年9月27日。

22) 「文献に乏しい我が樺太」『樺日』昭和4年9月18日。

23) 『樺日』昭和4年12月11日から「口碑に残る樺太古跡物語」と改題して連載。

この「文献欄」設置の目的について、9月27日の社説には、「我等島人は今や渡り島の気持ちから脱出せねばならぬ」と読者に呼びかけ、「我等父であり母である者は領有当時より子の時代に至るまでの様々の出来事を子に伝えておく義務がある、吾等の子孫が此島を郷里として此郷里を愛する時、必ずやこの郷里樺太の「正史」を編むものがあらはれる」ため、子孫に向けた歴史資料の記録化が述べられている²⁴⁾。

「文献欄」の設置とともに、菱沼の地名研究は対象地域を広げ、昭和4年10月14日から「樺太の地名の意義と内地の地名」の連載を始める。樺太の地名はアイヌ地名を基に漢字表記されたものが多く、地名解はアイヌ語の研究となった。

1.4 島内研究者との交流

アイヌ語地名研究の過程で菱沼は富内村の葛西猛千代を知る。葛西猛千代は明治40年(1907)3月に青森県庁から樺太庁に出向し、警察事務、巡査部長を経て、同42年から庶務課と長官官房秘書係を兼務した。葛西の業務は先住民の「指導事務取扱」であり、農業奨励のための指導とともに、樺太アイヌの生活習慣や祭祀儀礼を調査していた。

樺太庁は先住民を統治するため、居住地を設定して転居させ、教育所を設けて日本語教育を行っており、葛西は「壮年輩はアイヌ語より寧ろ日本語に通曉」しつつあることから、「古老アイヌ物語せば彼等古来の風俗習慣は勿論地名の意義湮滅して知る事能はざる」ため、古老からのアイヌ語収集に取り組んでいた²⁵⁾。

葛西は明治44年9月に富内郵便局長を拝命した後も、アイヌ語の調査を続け、昭和3年には、先住民への樺太庁の政策や生活文化の記録をまとめた『樺太土人研究資料』と、附属資料『アイヌ語地名解アイヌ語集』を発行する。同書は富内尋常高等小学校長の平野勇助の協力を得て謄写版で40部作成されたが、頒布希望者が多く、附属資料は訂正増補版が百部再版された。また同書の内容は『樺日』紙面にも掲載された²⁶⁾。

葛西について、菱沼は「樺太に真にアイヌを知り真にアイヌ語を解し、アイヌの地名を実際に地名について研究した」と評価し、「アイヌ研究と樺太変遷の研究から精神的には知人であった我等は会ふ事に於て初対面である一見十年の知故」となったという²⁷⁾。菱沼は葛西のように島内在住で研究活動をしている住民を求め、教員や他の新聞雑誌記者、樺太庁博物館の専任職員となった菅原繁蔵など、郷土研究の人脈を広げる。

2 樺太郷土会の活動

2.1 樺太郷土会の結成と博物館

昭和5年(1930)4月27日、「南樺太における史跡、古跡及自然物の探求、アイヌ、オロツコ、ニクブン等の樺太在住の異民族の研究と云つたことを比較的自由的な立場にある会合」が樺太庁博物館の一室で開かれた。この時、「東海岸の古墳でまだ内地人の発見されていないものが沢山ある」

24) 菱沼右一「社説 樺太文献欄設置」『樺日』昭和4年9月27日。

25) 葛西猛千代『樺太土人研究資料』(私家版, 昭和3年) 例言1～2頁。

26) 葛西猛千代「樺太土人に就て」『樺日』昭和4年8月29日。不定期連載。葛西の記事は雑誌『樺太』や『樺太時報』にも掲載される。

27) 菱沼右一「富内から落帆へ三 トンナイシヤの夜」『樺日』昭和5年1月19日。

ことが話題となり、「従来樺太には研究の団体が無いために空しく内地から来て勝手に蹂躪され」ていたことから、東海岸栄浜村の遺跡調査が計画される²⁸⁾。この会合に参加した13名を主体に、樺太郷土会が発足する。会務を担当する幹事には、豊原高等女学校教諭戸田桑次郎、豊原中学校教諭森本有親、樺太庁博物館職員菅原繁蔵、『樺日』記者松田清作が就いた²⁹⁾。会員は「歴史専攻者や植物、考古学、鳥類動物、昆虫、土人、地名等夫々独自の研究を有して居る人達」³⁰⁾であり、菱沼との親交により樺太庁長官縣忍や農林部長岡本保三も参加しているが、官立の組織ではなく、有志の会であった³¹⁾（表2参照）。

4月、樺太郷土会30名は東海岸栄浜村の遺跡調査に向かい、栄浜村長乗富慶之、栄浜小学校長齋藤了雄らの案内で、竪穴のある丘へ案内される。森本有親により遺跡はチャシと確認され、「乙名ヶ丘」と名付けられた³²⁾。遺跡地域は農耕地として殖民区画がされていたが、郷土会は樺太庁に処分停止を陳情し、同年8月7日に遺跡地区として保存されることになる³³⁾。その後は、道路工事で遺跡が発見されると、樺太庁から樺太郷土会に報告され、会員が調査に赴くようになる。

昭和5年6月29日の『樺日』には、以下の樺太郷土会の会則が掲載された³⁴⁾。

- 第一条 本会は樺太郷土会と称す
- 第二条 本会は事務所を樺太庁博物館内に置く
- 第三条 本会は史蹟名勝天然紀念物の調査研究を為し是れが保存開発を計るを以て目的とする
- 第四条 本会に於いて調査研究の為に蒐集したる資料は樺太庁博物館に寄贈するものとする。
- 第五条 本会の目的を達せん為め左記事業を執行す
 - 一、樺太に於ける遺蹟物の研究
 - 二、樺太に於ける前人功績の調査
 - 三、樺太に於ける土俗の研究
 - 四、樺太特産動植物及び鉱物の調査研究
 - 五、樺太に於ける名勝の研究
 - 六、以上各頁に対する保存及び紹介（標柱、パンフレットに依る外官庁に対し申請の方法を採る）
 - 七、実地踏査、講演会、研究会出版物の発刊等
- 第六条 本会は中央郷土会と連絡を計り会員研究の便宜を計るものとする

28) 菱沼右一「樺太郷土会の自由放談会」『樺日』昭和5年4月29日。

29) 「樺太の郷土資料研究 郷土会生る」『樺日』昭和5年4月29日。

30) 菱沼右一「郷土会の活躍とその実践と人物二」『樺日』昭和5年11月19日。

31) 菱沼右一「郷土会の活躍とその実践と人物一」『樺日』昭和5年11月18日に、会の活動について「総ての費用は一切自分持ちである他から何等応援を受けない」とある。

32) 菱沼右一「『乙名ヶ丘』はチャシ（砦）か」『樺日』昭和5年5月6日～11日。森本有親「乙名ヶ丘の一考察」『樺日』昭和5年5月13日～15日。

33) 「遺跡地区として乙名ヶ丘を保存 樺太庁が本月中に区画」『樺日』昭和5年8月8日。

34) 「樺太郷土会 会則を新に制定す」『樺日』昭和5年6月29日。

この会則には、郷土会の活動は樺太庁博物館を中心に、研究成果を史跡保存や講演会、出版によって公開することが明記されている。樺太庁博物館は明治42年に資源調査の資料を収蔵展示するため樺太庁舎内に設置されたことに始まり、物産陳列所としての役割もあった。昭和2年に学務課の管轄となり、社会教育施設として整備される。教職員を中心に博物館整理委員会が設置され、小学校長で植物研究者であった菅原繁蔵が専任職員となった。

樺太郷土会では、遺跡調査での出土物の収集や「貝塚の断面」の実物標本も制作し、資料の充実を図る³⁵⁾。展示整備の成果として、昭和6年7月の閑院宮戴仁親王の来島では、見学する施設に樺太庁博物館が選ばれ、『樺日』社説では「博物館を中心として二ヶ年に亘つて活動した我等の郷土会の努力も斯くの如くにして間接に大なる光栄に浴した」ことから「多数の郷土会員諸氏が多くの時間を各自の費用を投じて活動に対して誠に報ひられた」と称賛している³⁶⁾。

2.2 顕彰活動

昭和5年6月、大日本水難救済会樺太支部開設のため、同会副会長の花房太郎海軍中將が来島する。花房は明治37年に巡洋艦千歳の航海長として、樺太亜庭湾大泊（当時はコルサコフ）沖での巡洋艦ノヴィークとの海戦に参加しており、同艦の副長であった東伏見宮依仁親王の御付武官を務めた経験もあった。菱沼は花房の講演会³⁷⁾を開き、花房が計画する記念碑の建設に樺太郷土会は協力を約束した³⁸⁾。翌昭和6年9月には「依仁親王殿下武功記念碑」が、大泊町神楽ヶ岡に建立された³⁹⁾。

花房はこの時、文久2年(1862)の遣欧使節団竹内下野守保徳一行の写真24枚を縣長官に寄贈する。写真は明治18年に父花房義質がロシア海軍中將から贈られた複写写真であり、使節団が樺太国境問題で赴いていることから、現地の歴史資料として寄贈された。菱沼はこの写真と外交問題の背景を解説するため『樺日』の文献欄に「国境を繞る外交史上の樺太」を連載している⁴⁰⁾。

また、豊原町市街から樺太神社に向う神社通りに整備された並木道路が、領有初期の第一部長中川小十郎により設置されたことから、その由来を記した「中川小十郎氏頌徳碑の建設」が郷土会の会合で計画された⁴¹⁾。計画が報じられた7月25日の『樺日』コラム記事「南船北馬」では「斯うして樺太も一步步と郷土らしくなる」と紹介されている。

2.3 『樺太の地名』の出版

昭和5年8月15日、樺太文献叢書の第一巻として『樺太の地名』が出版される。郷土会発足時

35) 菱沼右一「郷土会の活躍とその実践と人物三」『樺日』昭和5年11月20日。郷土会では土器や石器に比べ、貝塚の重要性が知られていないことから、「貝塚の断面」標本を「「貝塚とは斯くの如きものである」と云うことを一目して諒解し会得出来る様に作った」という。「恐らく我が樺太博物館以外にはないことであろう」と自賛している。

36) 「博物館と我等の郷土会」『樺日』昭和6年7月16日。

37) 講演録は花房太郎「露艦ノービック追撃の思ひ出 往年の軍艦千歳航海長」『樺日』昭和5年7月15日～17日掲載。

38) 「東伏見宮様の記念碑を建造する花房子爵」『樺日』昭和5年6月28日。

39) 「由緒深き神楽ヶ岡に巍然たる武功記念碑」『樺日』昭和6年9月17日に除幕式の写真、碑文、花房太郎と縣長官の式辞が掲載されている。

40) 菱沼右一「国境を繞る外交史上の樺太一」『樺日』昭和5年6月27日。使節団の写真は『樺太庁博物館要覧』（同館、昭和12年）の「歴史室」の写真に展示が確認できる。

41) 「樺太郷土会の緊急会合」『樺日』昭和5年7月25日。

の会合で「原語が未だ破壊されてをらぬ」樺太の地名研究が提案され、菱沼は「先年から興味を持っている関係上島内の研究家を物色した所大泊中学校の西鶴定嘉教諭及富内郵便局長葛西猛千代翁の如き先輩があることを知って共に研究」することになった⁴²⁾。菱沼、葛西とともにアイヌ語研究に加わった大泊中学校地歴教諭の西鶴定嘉⁴³⁾は、江戸期の文献から考察した地名研究を教育関係の会誌に発表していた⁴⁴⁾。

『樺太の地名』は葛西による樺太アイヌの古老から取材した考察、西鶴定嘉の古地図や文献に記された地名と地域史からの考察とともに、菱沼右一のジョン・バチュラーや永田方正ら明治期の北海道の地名研究を参考にした考察も地名ごとに書かれており、執筆者により見解の分かれる解釈は並記されている。この本は島内で好評を得て「樺太で出版されたもので四千部以上も突破した」という⁴⁵⁾。

菱沼右一は社説に「蕃語として省みられなかつたアイヌ語は何ぞ図らん我等の言葉に根本的に編込まれて居ることに気が付いた、アイヌ語の研究の勃興は蓋し当然である」⁴⁶⁾と研究の意義を示し、刊行後も独自のアイヌ語地名研究を続ける。

昭和5年10月、菱沼は上京し、「郷土研究の中心的人物である東京朝日新聞社の柳田國男さんともお目に掛かつて樺太郷土会と中央学会との完全なる連鎖を取ることを依頼」する⁴⁷⁾。このとき、柳田に『樺太の地名』を渡しており、「郷土会の人々の手に成つた『樺太の地名』が中央の郷土研究家につつて吾々が思つて居るより、より大きな興味を以て迎えられていることを知った」と報告している⁴⁸⁾。

樺太郷土会の会則第六条には、内地の郷土研究活動と樺太郷土会の活動の連携を意図しており、柳田國男との交流を通じて、樺太郷土会と全国各地の研究団体につながりを作ろうとしたのであろう⁴⁹⁾。昭和5年に農村教育研究会が編集・発行した『郷土研究家名簿』の樺太の欄には、菱沼と郷土会員の戸田桑治郎の名前が記載されている⁵⁰⁾。

2.4 雑誌『樺太』からみた樺太郷土会の評価

昭和5年1月、雑誌形態の月刊誌『樺太』が民間の出版社である樺太社から発刊される（以下、雑誌『樺太』と表記）。同社は瀬尾勇治郎が昭和4年に設立し、雑誌『樺太』は昭和17年12月ま

42) 菱沼右一「郷土会の活躍とその実践と人物四」『樺日』昭和5年11月21日。

43) 西鶴定嘉は明治29年（1896）大分県に生まれ、大分県師範学校を卒業し県内の小学校で教鞭をとり、地理科中等教員免許取得後、大正11年大分県杵築高等学校嘱託を経て、愛媛県立大洲中学校教諭となり、大正14年3月に樺太庁大泊中学校に転任した。

44) 西鶴定嘉「樺太アイヌ」『地理教材研究』第7輯（地理教材研究会編、目黒書店、大正15年1月、10～72頁）に「樺太地名考」。西鶴定嘉「樺太地名研究」『樺太教育』第4巻第3号（樺太教育会、昭和3年12月、166～186頁）、同誌には昭和4年1月から3月まで「樺太の地名研究」を連載。

45) 「郷土会の活躍とその実践と人物四」『樺日』昭和5年11月21日。

46) 「社説 アイヌ語研究の勃興時代」『樺日』昭和5年8月1日。

47) 菱沼右一「郷土会の活躍とその実践と人物一」『樺日』昭和5年11月18日。

48) 菱沼右一「郷土の研究熱」『樺日』昭和5年10月19日。

49) 会則には「中央郷土会と連携」とあるが、明治43年に新渡戸稲造、柳田國男ら結成した郷土会は活動を停止しており、昭和5年当時、柳田國男が主宰していた談話会は昭和4年に会誌『民族』を休刊させ、後継する団体は作られていない。

50) 『郷土研究家名簿』（農村教育研究会、昭和5年、91頁）。

で発行されている。同社社長の瀬尾は、元樺太庁巡查部長であり、縣長官の就任に伴う警察部内の人事異動で、「喜多系統だとか政友系統だとか」⁵¹⁾と前長官の派閥とみられたことから退職したという経緯があり、樺太庁への批判的な記事や政策論では『樺日』と対立することもあった。また他の新聞記者からの投稿もあり、政治・経済の他にゴシップ記事など硬軟併せた内容であった。

同誌に論説記事を寄稿している元『樺日』主筆藤井尚治⁵²⁾は、「樺太には過去の沿革を知るに足る参考資料がない」ことから、樺太の拓殖政策が長官交代ごとに転換され、「先人の成功の課程も分らねば、またその失敗の理由も究められず」にしていることを問題としており、領有初期の移住者にも「生きたる史実をとり纏め、開拓史大一期の記録の正確をせねばならない」と考えていた。そのため「菱沼右一君はこの点に着目し同紙に文献欄を設け、樺太に於ける既往の文献を蒐集し、逐次整理化新聞記事の一つとしてこれを連載することにされたのは、吾人の最も欣快とさする所」と賛意を述べている⁵³⁾。

樺太郷土会については、雑誌『樺太』昭和5年7月号で、会の趣旨に「われ等も大賛成」と紹介され、学術的な研究だけでなく「樺太を以つて郷土であると云ふ觀念を涵養せんとするのならば、樺太を住心地よい所にすることが先決問題」であることから、研究対象を「一步進んで生活の現実に即した。例へば住宅問題、冬期間に於ける暖房装置の問題、食餌の問題、娯楽機関の問題等々を始めとして、更に教化的方面に於ても、隣人扶助和合精神の涵養の如き、成人教育等の指導研究にも意を用いて『住心地よき樺太』建設の為に貢献する一機関となって活動せられることを希望する」と研究対象を生活文化に拡大するよう提言している⁵⁴⁾。

雑誌『樺太』誌上でも、郷土研究の特集が組まれ、郷土会員の執筆による記事や初期入植者の回顧談が掲載され、藤井尚治もこの時期からアイヌ語研究、幕末明治初期の郷土史話の記事を執筆している(表3参照)。

『樺日』記者で郷土会幹事の松田清作は雑誌『樺太』で会員の紹介記事を寄稿しており、菱沼右一については「何も氏が渡島して始めて郷土研究家が出て来たわけではない。彼等は常に渦巻きたい気分はあつた。けれどもどうしても其の中心点が見つからなかつたのだ。其処へ菱沼さんが飛び込んできてグルッとやったから堪らない、猛烈な勢で回転し、可なり安全地帯にあつた筈の長官、農林部長まで引き込まれざるを得なくなつてしまつた」と、会の主導的な役割を評価している⁵⁵⁾。また、雑誌『樺太』記者山野井洋の戦後の回想によると、樺太社の社長瀬尾勇治郎は、「樺太庁をオン出され、雑誌『樺太』を創刊して一矢報いようと決断」しており、『樺日』への対抗意識があつたが、「瀬尾さんは菱沼の全くカマエのない人間味に惚れこんでしまった。文章にも人にも、まるっ

51) 瀬尾勇治郎「鋭覚鈍角」『樺太』第11巻大12号(樺太社,昭和14年12月,114頁)。

52) 藤井尚治は、明治21年富山県生まれ、明治41年に北陸タイムス入社、上京して東洋殖民学校を卒業し、博文館などの出版社勤務を経て、大正10年9月に『樺日』主筆として樺太に赴任する。昭和4年に退職し、上京して日本新聞編集局長を務め、昭和6年には新潟時事新聞社に入社する。上京後も創刊当初の雑誌『樺太』で論説や時評を発表し、『樺太年鑑』(敷香時報社,昭和5年)の編集を担うなど、樺太との関係は続いている。昭和26年逝去。経歴は藤井雪夫編『鬼谷・藤井尚治 余滴』(私家版,1987)11～12頁掲載の略歴に拠るが、職歴に年代の記載がないため、著書『越佐地名考』(新潟時事新聞社,昭和6年)自序と新聞研究所編『日本新聞年鑑 昭和5年』(名鑑74頁)より補った。筆名には、黒龍迂人、鬼谷山人がある。

53) 藤井尚治「樺太開拓史編纂の急務」『樺太』第2巻第5号(樺太社,昭和5年5月,22～26頁)。

54) 楠正知「時評 樺太郷土会に望む」『樺太』第2巻第7号(樺太社,昭和5年7月,9～7頁)。

55) 臥牛生(松田清作)「樺太郷土会を繞る人々」『樺太』第2巻第11号(樺太社,昭和5年11月,74頁)。

きり毒っ気というもののない菱沼さんのそれまでの瀬尾さんの触れたことのない、天衣無縫な人間味であった」という⁵⁶⁾。

郷土研究の他にも、樺太スキー連盟の創設や全島新聞記者大会の開催など、菱沼の発意で交流が生まれた団体もあり、菱沼についての同時代の証言や戦後の回想には、協調性と行動力を評価するものが多い。

2.5 樺太教育会との連携

昭和6年1月9日、豊原町役場にて郷土研究座談会が開催され、菱沼をはじめ近郊の会員や、縣長官と内部部長、豊原中学校長で樺太教育会会長の上田光曦など15名が出席した。樺太教育会は島内教職員の団体であり、この時期、内地の郷土教育運動の影響から樺太での郷土教育に取り組んでいた。会合では、樺太庁の文化政策が確認され、郷土会の活動も「今年度は近く公布される天然記念物名所史蹟保存法に関する調査及び私設図書館創設課題に就て主力を注ぐ事に決定」した⁵⁷⁾。

1月18日、樺太庁は史蹟名勝天然記念物保存規定を公布し、すでの庁令で保護されていた化石と高山植物の採取禁止を移行させ、史跡については公布と同日に設立させた史蹟名勝天然記念物調査会で検討を始める。この調査会には菅原繁蔵、西鶴定嘉ら郷土会会員が参加している⁵⁸⁾。

座談会でもう一つの議題となった「私設図書館創設課題」について、郷土会では、樺太庁長官官房文書課が所蔵している「樺太及殖民地に関する書籍」の一般公開を希望しており、1月13日には樺太庁と「一致団結して行へば今年度には簡易図書館の創立は難事でない」と社説で報じていた⁵⁹⁾。文書課の蔵書は、大正10年(1921)5月、訓令第71号「樺太文庫規程」により庁舎に文庫が設立され、同年10月14日の訓令第160号「樺太庁図書取扱規程」により公開が義務付けられていたが、この規程では「図書ハ庁職員ノ請求ニ依リ之ヲ貸付ス」(第二條)とあり、利用者は役所の職員に限定されていた⁶⁰⁾。

文庫を管理していた文書課雇員の土井武雄は、樺太庁が団体会員となっていた青年図書館員聯盟では代表者として申請されており、樺太郷土会の会員でもあった⁶¹⁾。翌昭和7年からは蔵書目録が発行されており、一般公開が準備されていたと推測されるが、昭和7年1月には樺太教育会の附属図書館が開館しており、のちに樺太文庫から書籍の一部が移籍され、公共図書館の役割を担うことになる。

昭和6年6月3日には、国民教育奨励会第22回夏季講習会が豊原町で開催され、島外の教職員も参加することから「樺太の社会的事情を十分に説明する」ための講演会が樺太郷土会により企画された⁶²⁾。演題は川村三郎「樺太先住民族の戸籍問題について」、菱沼「愛奴語の地名」、王子製紙

56) 山野井洋「瀬尾シャモ偲ぶ草2」『樺連情報』第289号(全国樺太連盟,1974年5月)。

57) 「樺太郷土会の座談会開かる」『樺日』昭和6年1月11日。

58) 樺太における史跡保存の経緯は、拙稿「樺太における史跡選定と顕彰事業の展開」『道歴研年報』第18号(北海道歴史研究者協議会,2017年)参照。

59) 「社説 今年の郷土会」『樺日』昭和6年1月13日。引用文中の「殖民地」は樺太各地の入植地を指す。

60) 『樺太廳文書事務提要』(樺太庁長官官房文書課,昭和8年)の第十二章「図書」217頁。

61) 『青年図書館員聯盟会報』第3年第1号(青年図書館員聯盟,昭和5年10月)。この団体は、昭和2年12月、大阪で結成され、図書館業務の改革運動を推進していた。樺太庁は昭和5年1月に団体会員として入会し、247番目の会員となる。

62) 「教員夏期大学に郷土会で講演」『樺日』昭和6年8月5日。

工場長山本省吾「樺太のパルプ及び製紙」、川西幸八「占領当時の回想談」、樺太庁農林部長岡本保三「樺太の農業及び林業」であり、樺太の歴史と現況を解説した内容となっている。

11月には、6・7日の2日間にわたり、樺太教育会主催による全島小学校教員研究発表会が開かれた⁶³⁾。議題は郷土教育に関する研究であることから樺太郷土会員との座談会が企画され、豊原第三小学校での発表の後、豊原町役場の会議室にて行われている⁶⁴⁾。

昭和6年に入ると、樺太郷土会の活動は、教育会の事業に協力した形で実施されている。『樺日』『文献欄』（「樺太の文献」）にも、全島小学校教員研究発表会での研究報告が掲載されているが、昭和7年9月20日を最後に紙面から「文献欄」の見出しはなくなる。

郷土会の出版活動である樺太文献叢書は、『樺太の地名』のあとに、昭和6年に博物館職員の菅原繁蔵著『樺太南半植物概況』⁶⁵⁾、豊原中学校教諭の大野東雲著『樺太西部山地帯の地質構造と石炭』、同『少数民族に就て（概説）』⁶⁶⁾の4巻まで発行されているが、会員個人の研究報告をまとめた小冊子であり、『樺日』での告知や一般販売の確認はできない。

昭和6年に入ってから樺太教育会との連携には、同会が郷土教育に取り組んだことや、樺太郷土会の会員に教職員が多いことから、活動を合同することが容易だったのであろう。同時にそれは郷土会単独での活動が減少していることも意味しており、会の中心人物であった菱沼右一の動向が影響している。この時期、樺太への政府の政策が転換期を迎え、菱沼の行動力もここに費やされていたとみられる。

なお、樺太教育会による郷土教育は教育理論としての研究に止まり、「郷土読本」などの教材の制作や教科と関連した郷土研究は、教員個人の活動となった。そのため熊本県教育会から樺太の教育視察に派遣された小学校教員の内田正助は、郷土教育連盟の機関誌に「オロツコ、ギリヤークやツンドラ地帯など皆想像外であつたりなどすると教育も多分に地方色をもつたものであろう」と先住民や自然環境などの地域性をもった研究を期待していたが、「東京直輸入」の理論研究であることを批判し、「樺太の郷土教育の正しき一つの流れを起しつつある」樺太郷土会との結びつきを強めるように提案している⁶⁷⁾。

3 樺太庁の拓殖政策

3.1 総合行政の見直し

菱沼が『樺日』紙面で郷土研究を提唱し、住民の郷土意識を求めた背景には、当時の樺太が政府からの特別会計に頼らず、自立した地方行政への転換が進められたことも影響していると思われる。

63) 「教員研究発表会」『樺日』昭和6年11月8日。

64) 「郷土研究に関する座談会」『樺日』昭和6年11月8日。座談会は11月5日の『樺日』に「郷土に関する座談会を開く」で告知されている。

65) 『樺太南半植物概況』は昭和6年7月発行。増補改訂され、『樺太の植物』（菅原繁蔵樺太植物研究後援会、昭和12年）、『樺太植物図誌』全4巻（樺太植物図誌刊行会、巖松堂書店、昭和12～15年）が刊行されている。

66) 奥付はないが『樺太西部山地帯の地質構造と石炭』（全14頁）、『少数民族に就て（概説）』（全14頁）は「序」に昭和6年7月の閑院宮戴仁親王の来島のため作成された調査書であることが記載されている。

67) 内田正助「北日本郷土教育旅行記」『郷土教育』第41号（郷土教育連盟編、刀江書院、昭和9年3月、62頁）。内田正助は熊本県彌富小学校訓導。詳細は拙稿「樺太における郷土教育」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』第15号（2016年）参照。

樺太郷土会が活動していた時期、浜口雄幸内閣は緊縮財政と行政整理の方針を取っており、樺太も外地行政を監督する拓務省廃止にともない整理改編の俎上にあがっていた。

総合行政であった樺太庁は、森林収入と特別会計による国庫補助を財源としていたが、昭和5年7月の内閣官房総務課行政刷新委員会では、「樺太庁特別会計ヲ廃止」と「普通ノ府県ト同様ノ自治体」を目的とした「樺太県案」がまとめられた⁶⁸⁾。翌8月には拓務省内に樺太行政調査会が設置され、総合行政体制の解体が予測されていた。

縣忍樺太庁長官は、赴任時の視察から、自然資源への依存から脱却した産業育成を構想しており、総合行政の体制維持を求めている。縣長官は政府への運動のため、大正12年に在京者の府県会に相当する親睦団体として設立されていた樺太協会を「政治的意味を含んだ有力な輿論代表の機関」⁶⁹⁾に改組させ、昭和6年度の予算編成で、特別会計への国庫補給金が削減された際、樺太協会は復活要求運動を起こし、樺太庁や住民の意見を代弁している⁷⁰⁾。

それでも予算削減は、樺太庁の行政整理に表れており、教育関係では校長や年配の教員の退職などの人員整理があった。樺太郷土会の会員にも大正期に赴任して研究活動をしていた教員が退職している⁷¹⁾。

昭和6年10月21日には、「樺太ノ特別行政制度ヲ廃シ大体北海道各府県ニ近似シタル制度ヲ設ク」る「樺太行政組織改正案」⁷²⁾が作成され、内務省への移管が検討された。これに対しても樺太協会では「沖縄縣以下に扱はれ結局北海道の一支廳となるものと考へなければならぬ故に移管に反対と意見一致」し、「全島一致猛運動」を計画する⁷³⁾。『樺日』紙面でも移管反対の論説記事が掲載され、縣長官を始めとする樺太庁や豊原町長らの移管阻止と政府の運動が発表された⁷⁴⁾。

この時期、樺太日日新聞社の社長沖島鎌三は、樺太協会の理事長を務めており、『樺日』には菱沼の上京と帰社の動向が頻繁に掲載されている。菱沼の東京での行動は不明だが、菱沼は『樺日』主筆と兼ねて、樺太庁農林部殖民課の「移民宣伝事項（無給）」⁷⁵⁾を請負っており、縣忍長官、岡本保三農林部長とともに、東北六県からの移民の招聘のため、仙台放送局からの樺太事情宣伝放送を行うなど、樺太庁の政策にも関係していた。そのため、国民新聞社時代の経験から中央官庁に詳しい菱沼は、樺太協会や樺太庁の運動を支えていたと思われる。

しかし、11月5日の臨時行政審議会総会で「樺太行政組織改正案」が可決されると、縣長官は「総

68) 「11 (1) 樺太県案」『内閣総理大臣官房総務課資料行政刷新委員会に関する件』JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.A15060047500 (国立公文書館所蔵)

69) 「樺太協会を復活して輿論代表の機関それはそうあるべきだ 縣長官きのふ語る」『樺日』昭和4年9月1日。

70) 「社説 樺太協会幹部の労を多とす」『樺日』昭和5年10月29日。記事によると、500万円案が160万円に削減されたが、陳情の結果、340万円までの回復が認められたという。

71) 当時、樺太庁内務部学務課視学官で辞職勧告を担当した金子利信の回想による(金子利信「10月茶話 樺太の図書館由来記」『樺連情報』第201号(全国樺太連盟, 1967年10月)。郷土会会員では、化石研究を専門とする春日忠孝(並川小学校校長)、葛西猛千代のアイヌ語研究を支援していた平野勇(富内小学校校長)などが退職している。

72) 「行政整理案、樺太庁」JACAR Ref.A15060264400 (国立公文書館所蔵)。

73) 「『樺太の森林移管は将来の爲めである』と井上蔵相と書記官長の意見一致 樺太協会では意見書提出」『樺日』昭和6年10月25日。

74) 「縣長官、職を賭して断然、反対を聲明す」『樺日』昭和6年11月6日。

75) 『職員録 昭和五年三月一日現在』(樺太庁長官官房秘書課, 昭和5年, 116頁)。北海道道立文書館所蔵。

予算に反対でない限り樺太の分に不服があつても遂には議会も無事に通過する」ことから、反対運動を中止する⁷⁶⁾。縣長官は、樺太庁の総合行政体制の解体と引き換えに、長期の拓殖計画の樹立を求め、12月に開会する第60回帝国議会での提出を目指して『樺太拓殖計画案』を作成する⁷⁷⁾。

この計画案は予算の問題で提出は見送られたが、昭和7年度予算案には西海岸線の北部延長（泊居 - 久春内）、甜菜糖業や養狐事業の補助などに反映される。しかし、予算成立前の12月13日、若槻内閣は総辞職し、政友会の犬養毅内閣が発足する。民政党政権で樺太庁長官となっている縣忍は辞任し、新長官となった岸本正雄は、総合行政を維持したまま、林政改革などに取り組むことになる。

3.2 菱沼の樺太退島

縣長官退任の翌昭和7年（1931）2月22日、菱沼は上京し、28日の『樺日』紙面には、菱沼の辞職を告げる社告と、菱沼自身による退社の謹告が掲載された⁷⁸⁾。退社後も樺太との関係は続いており、『樺日』編集部へ送った近況が紙面に掲載されている⁷⁹⁾。

菱沼は昭和7年秋、東京市麹町区に中央情報社を設立し、拓務省や外地に関係する官庁、企業の情報を専門とした業界紙『中央情報』と『拓務内外紳士録』、議会での外地関係の議事録を収録した『帝国議会拓務議事詳録』を発行する。中央情報社と樺太協会で樺太の拓殖計画の推進にも動いており、部下の回想によると樺太協会は「樺太庁東京事務所に代わって民間の立場から政官界の連絡あっせんの仕事に努めた」という⁸⁰⁾。昭和8年に樺太拓殖十五箇年計画が樹立されると、議会での審議や陳情運動などの記録をまとめた『樺太拓殖計画の全貌』⁸¹⁾を中央情報社から刊行している。昭和13年に菱沼は「政治的推進力として会の強化を図る意味で」樺太協会の理事に就いている⁸²⁾。

菱沼は中央情報社に樺太真岡町出身の荒沢勝太郎⁸³⁾を入社させ、樺太の宣伝にも取り組んでおり、昭和13年6月には、樺太郷土会で出版した『樺太の地名』をもとに、荒沢による地域の紹介文を加えた『樺太案内地名の旅』と、同年8月には荒沢の単著『粉雪の魅力 樺太のスキーと雪山』を

76) 「樺太の移管問題も遂に一段落ついた 私は私の信念に基づいて反対した而して敗れた ... と縣長官は語る」『樺日』昭和6年12月5日。

77) 『樺太拓殖計画案』（樺太庁、昭和6年、全390頁）では、昭和7年度から10年間の計画で「総経費一億百五十二万円」を計上。鉄道や道路・港湾、電信電話の拡張により島内の連絡を整備し、森林経営・移民召集・土地改良・農耕地開拓・水産振興などを目的とした。鉄道事業では、その後も実現しなかった恵須取までの西海岸線、真縫と久春内の東西を結ぶ中央横断線の開設を構想している。

78) 「社告」「謹告」『樺日』昭和7年2月28日。

79) 『樺日』昭和7年5月22日には菱沼の手紙が「近時身辺雑記」の題で掲載され、7月には樺太郷土会と中央スキー倶楽部の招待で竣工前の樺太ヒュッテを見学しており、来島が報じられている。また、昭和9年1月には、ロシア帝国領時代に流刑されたプロニスワフ・ピウスツキの遺族を探しに來たポーランドの通信社特派員を案内している（「波蘭陸相の義妹を訪ねて波蘭新聞記者來島」『樺日』昭和9年1月9日）。

80) 木村誠「戦前の樺太協会の話」『樺連情報』第345号（全国樺太連盟、1976年1月）。木村誠は、中央情報社の記者で樺太協会の運営にも携わっていた。

81) 『樺太拓殖計画の全貌』（中央情報社、昭和9年）。

82) 「菱沼、太田両氏を理事に推薦」『樺日』昭和13年6月24日夕刊。太田鎮雄は菱沼主筆時代に樺太日日新聞社の副社長を務め、この当時の社長。

83) 荒沢勝太郎は大正2年に真岡町に生まれ、樺太庁真岡中学校卒業後、『樺日』記者となり、昭和9年の上京後、中央情報社に勤務する。昭和14年には樺太庁嘱託職員となり樺太文化振興会の事務を務める。「荒沢勝太郎の作品とその周辺」『釧路春秋』第30号（釧路文学団体協議会、1993年、29頁）より。

同社より発行している。

昭和 18 年、菱沼の設立した中央情報社は日本拓殖協会へ併合され、菱沼は同会の理事となるが、翌昭和 19 年に逝去した⁸⁴⁾。

4 樺太郷土会以降の研究活動

4.1 木村信六の考古学研究

菱沼が樺太を去った昭和 7 年に、樺太郷土会の活動は停止している。藤井尚治が樺太郷土会発行の『樺太の地名』に感化され、「これ等の先輩によつて研究された処は漸く其一部分」であることから、同誌昭和 7 年 9 月号からアイヌ語による内地の地名研究を発表しているが、「この方面に対する研究は、その後果たして継続されて居るだらうか。一時盛んであつた樺太の郷土熱も、この頃だんだん下火になつたのであるまいか」と、疑問を投げかけている⁸⁵⁾。

『樺日』には、樺太郷土会の活動報告の記事はなくなり、先述したとおり、研究報告や資料紹介の舞台であった同紙「文献欄」も 9 月 20 日が最後となった。12 月の「中川並木の碑」の建立を伝える記事に「樺太郷土会がその記念碑を建立すべく計画」⁸⁶⁾したことが紹介されて以降、団体としての活動は紙面からは確認できない。

この頃、本斗町在住の考古学研究者木村信六は、町内で発行されていた『樺太新聞』に論説を発表し、「一時盛んであった樺太郷土会の活動も菱沼右一氏去りて後は寥々」となった理由を「樺太庁当局のこの種の学術研究を没却し適当なる後援を為さざるが為め」と指摘している⁸⁷⁾。木村はこの論説で、「近年著しく勃興したる郷土研究熱に煽られ樺太各地に散存せる遺跡は好事家の手により発掘せられ出土遺物は内地各地の学界その他に参考資料または珍しき品として移出されてゐる」と郷土研究の流行による弊害も述べている。

木村信六は樺太庁の警察官を務め、赴任地で発掘した資料を樺太庁博物館に寄贈しており、専任職員の菅原繁蔵と交流があった。郷土会が結成された昭和 5 年には西海岸の本斗警察署に赴任しており、同年起工された本斗内幌間の鉄道敷設工事により、貝塚を含む遺物遺跡の破壊を目の当たりにしたことから、『樺日』や地元紙『樺太新聞』で遺跡の保護を訴えている。会員名簿に名前は確認できないが、『樺日』「文献欄」で「本斗付近の先住民族遺跡」⁸⁸⁾を連載しており、当初は会の活動に期待していたと思われる。

昭和 6 年 1 月に樺太庁は史蹟名勝天然紀念物保存規定を公布しているが、それ以前の化石と高山植物の採取を禁止した庁令から移行させたのみで、新たな指定はなされていなかった。木村は内地

84) 逝去を伝える『朝日新聞』昭和 19 年 4 月 4 日朝刊によると、菱沼の肩書は「大東亜日報社長」「樺太協会理事、日本拓殖協会参与も兼任」となっている。

85) 黒龍迂人(藤井尚治の筆名)「アイヌ語と内地の地名」『樺太』第 4 巻第 9 号(樺太社, 昭和 7 年 9 月, 134 頁)。

86) 「中川並木の碑」『樺日』昭和 7 年 12 月 4 日。碑は現在、ユジノサハリンスク(旧豊原)市内のサハリン州郷土博物館前庭に移設されている。裏面に昭和 7 年 8 月 23 日付の豊原町長高橋弥太郎による謹書はあるが、樺太郷土会の関係を示す記述はない。

87) 木村信六「再び遺跡遺物の保護保存に就きて」『樺太新聞』昭和 7 年 12 月 15 日。記事は『木村個人研究』(私家版, 昭和 8 年 10 月発行、北海道立図書館所蔵) 附 1 ~ 4 頁に再録。新潟武彦が編集した『千島・樺太の文化誌』(北海道出版企画センター, 1984 年, 101 ~ 103 頁) に収録。

88) 「本斗付近の先住民族遺跡」『樺日』3 月 26 日から 29 日。記事は 4 回分が確認されているが、初回の遺跡紹介から連載記事は全 5 回であったと推測される。

での史跡保護と比べ、「何等先史時代の遺跡にして本規定を受け保存さるるに至りたるものなきは島民として否学界のため遺憾とする処である」とこれを批判し、樺太庁による研究機関の設置と遺跡の調査、保存規定を適用した遺跡の永久保存を要望している。

その後、木村は史跡保存の啓蒙や、遺跡の紹介に取り組み、昭和8年6月に札幌で開催された北海道原始文化展覧会への資料の出品と、自身も講演会に出席する⁸⁹⁾。また自宅に研究所を設け、調査や報告書や島内の学生に資料を公開するなど、遺跡保護の普及啓発に努め、昭和7月には本斗町公会堂で「先人遺物展」を開催している⁹⁰⁾。

木村のように、個人の研究活動は郷土会停止後も続いており、郷土会に類似した名称での活動も一部にみられる。

4.2 樺太郷土研究社

拓殖計画の実施から3年目を迎える昭和11年(1936)8月11日から15日間、大泊町、豊原町を会場に、樺太庁が主催し、島内の各産業団体が参加する樺太庁始政三十年記念共進会が開催される。この博覧会は、趣意書に「本島の文化並に拓殖進展の全貌を汎く島内外に紹介すると共に各地諸般の資料を網羅展示し以て本島将来の発展に資せむとす」⁹¹⁾とあり、領有三十年目を祝う記念事業であった。しかし、産業の発展が主題となり、歴史を顕彰する展示は設けられず、陸軍館、海軍館に日露戦争時の樺太戦役の展示、大泊町の会場に、皇族や政治家の品、樺太の文献・地図が展示されているのみであった。

そのため、樺太郷土会員でもあった元小樽新聞樺太支局長の市川與一郎⁹²⁾や、川西幸八が所属する領有初期の移住者の団体「三八会」から、樺太の歴史を顕彰した展示館が企画される。共進会に合わせて、市川らは「樺太郷土研究社」を設立し、開催期間中、豊原会場の近くに、樺太歴史参考館を開設する。その目的を『樺日』では「両氏が敢てこの歴史館の経営に乗出したのは共進会場に歴史的なものが少いからその不足分を民間に於て補ふと云ふ処にある」と伝えている⁹³⁾。樺太歴史参考館では、「豊原三八会員諸氏の出品参考資料」の他、江戸時代や領有当時の様子を模型で再現した「世界的探検家、樺太の大恩人間宮林蔵先生探検模型」「先住民族アイヌの生活状態模型」「樺

89) 「先住民の遺物三千点 原始文化展に出陳」『樺日』昭和8年6月11日。展覧会の様子や研究者との交流は木村信六「北海道原始文化展覧会を観るの記」『樺太』第4巻第9号(樺太社, 昭和8年9月)。会場では北海道網走のモロロ貝塚出土の土器と樺太の土器が同系統のものとなり、オホーツク海沿岸の文化圏の存在が明らかになった。

90) 「先住民族文化を彷彿たらしめる本斗署の木村信六氏」『樺日』昭和9年7月20日。

91) 「樺太拓殖共進会趣意書」『樺太庁始政三十年記念 樺太拓殖共進會誌』(大泊町役場, 昭和12年)。

92) 市川與一郎(筆名・天涯)は明治3年(1870)新潟県生まれ。新潟県内の新聞社に勤め、大正13年、小樽新聞樺太支局長として赴任、昭和5年に小樽新聞を退職し、樺太庁の各種の委員を務め、昭和12年の豊原市第一回市会議員に当選する。郷土研究の活動では、昭和3年に日露戦争の顕彰を目的とした樺太戦蹟保存会を発足させ、翌年には郷土研究の団体南樺史蹟保存会を結成しており、樺太郷土会にも結成時から参加していた。昭和17年退島し、北海道小樽市に移る。昭和20年逝去。新聞記者時代の樺太の写真、書籍など、市川與一郎の旧蔵資料は余市町教育委員会所蔵「市川文庫」に保存されている(余市町図書館収蔵)。市川の経歴は余市町図書館編『余市町図書館市川文庫資料目録』(1995年)参照。研究論文に井潤裕「アジテーター市川與一郎と「物語」としての尼港事件」『境界研究』特別号(北海道大学スラブ研究センター内グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成 スラブ・ユーラシアと世界」境界研究ユニット, 2014年)がある。

93) 「宛然、歴史絵巻の樺太開拓参考館(下)」『樺日』昭和11年7月28日。

太先駆者の奮闘状態模型」「樺太先駆独身者の生活状態模型」が設置され、木村信六が所蔵する土器石器などの「石器時代の遺物 数百点」も展示された⁹⁴⁾。

『樺日』に代わり、郷土研究の成果は雑誌『樺太』や樺太庁発行の広報誌『樺太庁報』(『樺太時報』)⁹⁵⁾に掲載されており、かつての郷土会員も執筆している。(表4・表5参照)

4.3 樺太庁博物館

郷土会により展示物が整備された樺太庁博物館は、専任職員の菅原繁蔵が木村信六などの協力を得て事業が続けられた。昭和9年(1934)3月には、樺太に憲兵分隊が設置されることになり、博物館が使っていた旧樺太守備隊司令官舎を明け渡すことになる⁹⁶⁾。博物館は隣接する旧樺太守備隊兵舎の一棟に移転するが、樺太庁や陸軍の都合により展示規模が縮小されたことに『樺日』は社説で「博物館が追ひ立てを喰つて慌てて移転先を物色しなければならぬとは何といふ情けない状態であるか」と批判し、新館の建設を訴えている⁹⁷⁾。この時、樺太拓殖十五箇年計画が実施されていたため、同年7月には、昭和10年度予算に博物館建設費が計上され、三ヶ年計画で建設されることになった。その間、樺太庁博物館は旧兵舎に移り、遺跡調査の報告が『樺日』に掲載されている⁹⁸⁾。

昭和10年7月には豊原中学校と豊原高等女学校に挟まれた敷地に、帝冠様式と呼ばれる鉄筋コンクリート造三層の博物館新館の建設が始まり、昭和12年8月に開館する。専任職員の菅原繁蔵は、11月に「樺太庁博物館事業を後援し、郷土の自然文化を以て研究する目的」⁹⁹⁾の「樺太郷土研究会」を結成する。会員は小学校教員が中心だが、かつて樺太郷土会員であった葛西猛千代、市川與一郎、乗富慶之も参加している¹⁰⁰⁾。翌13年4月には機関誌『北方文化』創刊号、同年8月には第2号が発行され、島内教職員の考古学、自然科学の報告や、島外の「科学ニュース」、博物館の事業報告や行事予定が掲載された。

昭和14年、樺太庁は棟居俊一長官の主導により、生活文化や学術文化の向上を図る文化政策に取り組む。その推進のために組織された樺太文化振興会から「郷土研究の栞たる小文献」(刊行趣旨)

94) 「宛然、歴史絵巻の樺太開拓参考館(上)」『樺日』昭和11年7月27日。これらの展示を撮影した写真絵葉書も発行され、前掲の「市川文庫」には、樺太歴史参考館の絵葉書や写真原本も保存されている。

95) 『樺太庁報』は、『樺日』掲載の樺太庁の公報欄がまとめられ、昭和5年9月に同新聞社から発行された。昭和12年5月には樺太庁長官官房文書課の編集により従来の公報とともに、政策の解説や産業・文化に関する学術的な記事などが掲載されるようになった。昭和14年1月号から『樺太時報』に改称される。雑誌『樺太』(樺太社)と『樺太時報』(樺太庁)は、昭和18年1月に統合され、北方日本社(本社・豊原市)発行の月刊誌『北方日本』となる。

96) 樺太守備隊は大正2年に廃止されたが、領有初期に建てられた樺太守備隊司令官舎は、陸軍所有のまま樺太庁に貸し出されていた。

97) 「博物館移転と文化施設問題」『樺日』昭和9年3月14日。署名はないが、当時の主筆福家勇は、昭和6年に『樺日』文獻欄で「現代の樺太」を連載した人物である。

98) 博物館職員菅原繁蔵の息子菅原憲光(のちの作家寒川光太郎)による千歳村北貝塚での発掘調査が「鈴谷貝塚の発掘」『樺日』昭和9年6月10日～14日に発表され、翌年には島内各地の遺跡調査について「先住民族の遺跡調査」『樺日』昭和10年6月10日～12日の連載記事が確認できる。

99) 「樺太郷土研究会会則」『北方文化』第1巻第1号(樺太庁博物館・樺太郷土研究会, 昭和13年, 19頁)。

100) 樺太郷土研究会の会員名簿は『北方文化』第1巻第1号に58名、同第2号17名が掲載されている。豊原市内の小学校28名(第一小21名、第二小1名、第三小4名、第四小2名)、豊北村小沼の拓殖学校14名、泊居小学校6名が参加。

となる「樺太叢書」「樺太庁博物館叢書」が刊行され、雑誌『樺太』に連載された太宰俊夫の翻訳によるチェーホフ「サハリン島」や、『樺太庁報』に連載された西鶴定嘉による通史「樺太史の栞」が樺太叢書にまとめられた。

樺太郷土会の活動が停止した以降も、かつて関係者により郷土研究が個人や別団体を組織して続けられており、樺太庁博物館や樺太庁の事業にも反映されたといえよう。

4.4 アイヌ語地名の研究

樺太の郷土研究者たちが新たな活動の場を設けたのに対し、『樺日』では郷土研究の特集欄が戻ることはなかった。『樺日』関係者の活動では、記者の能伸文夫¹⁰¹⁾が樺太史の逸話を集め、菱沼や郷土会幹事であった松田清作らの協力により昭和8年に『北蝦夷秘聞 樺太アイヌの足跡』¹⁰²⁾を刊行している。同書に出典の記載はないが、その記述から『樺日』に連載された山野天海の「口碑に遺る樺太古跡譚」や「文献欄」を資料に書かれたとみられ、郷土研究の影響の一つであるといえよう。

また、樺太を去った後も菱沼右一や藤井尚治はアイヌ語地名の研究を続けており、彼らの独特な研究は、言語学の研究として顧みられないものの、内地の地名や古語をアイヌ語で解明することで、アイヌ民族が先住民族であることを強調している。

菱沼は、『樺日』で発表していたアイヌ語による内地の地名解を、自身が発行する業界紙『中央情報』でも掲載し、昭和14年11月に論考をまとめた『アイヌ語よりみた日本地名新研究（江戸以前の東京）』を発行している。同書は自序に大川周明著『二千六百年史』（第一書房、昭和14年）冒頭の「日本の地名は殆んど、アイヌ語らしきものである」「アイヌ民族は日本諸島の先住民であり、日本民族は彼等に後れて到着した」を引用し、東京や関東各地の地名のアイヌ語による考察を事例にあげている。

菱沼はアイヌ民族を「先住民族」と認識しているが、「先住者に依つて命名された地名」を「その儘踏襲して、敢へて改めようともせなかつた」ことに、大和民族の「海より広き雅量」が示されているとしており、研究の目的は「我が祖先の偉大さは、日本地名の存在に依つて明らかにされる」というものであった¹⁰³⁾。

藤井尚治は、雑誌『樺日』昭和13年6月号の論説記事「樺太文化とアイヌ語」で、「日本の古語と先住民族アイヌの言語との関係」の研究により、「古代に遡れば遡る程、日本の本土に流通して居た原語中に於けるアイヌ語の分量が多い」ことからアイヌ語研究の重要性を述べ、樺太においては「師範学校、中学校、女学校に於て樺太の郷土史を教授せしむる事」とともに「先住民の言語、特にアイヌ語に関する教育を課外に於て或る程度まで授くる事」を提案している¹⁰⁴⁾。なお、藤井のアイヌ語研究は、日本の古語への探求となり、万葉集を解説した『日本古代語寶燈』（日本思想研

101) 能伸文夫は、新潟県出身、明治大学法学部卒業後、新聞記者となる。『樺日』を経て菱沼が経営する中央情報社に入り、同社から昭和9年に『南洋紀行 赤道を背にして』、昭和10年に『血に彩られた北樺太 現状と資源』を刊行する。前書の執筆を機に南洋諸島の専門家となり、南洋興発や南洋庁の嘱託を務めた。昭和58年(1983)逝去。小菅輝雄編復刻版『南洋紀行 赤道を背にして』（南洋群島協会、1990）のあとがきより。

102) 発行所は大泊・豊原にある書籍商北進堂、印刷者（発行者）は『樺日』社長の太田鎮雄。復刻版（第一書房、1983）あり。

103) 菱沼右一『アイヌ語よりみた日本地名新研究（江戸以前の東京）』（中央情報社、昭和14年、序2頁）。

104) 藤井尚治「樺太文化とアイヌ語」『樺太』第10巻第6号（樺太社、昭和13年6月、109～115頁）。

究会出版部、昭和18年)に結実するが、同書では、日本語に大きな影響を与えたアイヌ民族を「独特の精神的文化を伝えた優秀民族であり、殊に異人種を抱擁する雅量を特性」と称賛しながら、「今日の北海道、樺太に残存せる」アイヌ民族とは「本質的に違つて居る」としている。

内地の地名や古語にアイヌ語の存在を論じながらも、菱沼、藤井に共通する先住民族の認識には、大和民族を受け入れる異民族像が投影されているといえよう。

結びにかえて

本稿では『樺太日日新聞』と樺太郷土会の活動を中心に、民間の雑誌・新聞による郷土研究の取り組みをまとめた。樺太郷土会は実質的には二年ほどの活動であったが、新聞での活動報告や文献の紹介、樺太庁への提言、出版活動により、樺太における郷土研究の活動を拡大させた。その目的には、資料の紹介や口碑の活字化、史跡保護にみられるように、後世の樺太の住民も視野に入れた郷土づくりがあり、樺太が移住地から郷土へと移行しつつある時期であることを表しているといえる。

樺太郷土会の組織については、『樺太日日新聞』の主筆であった菱沼右一により、紙面を通して新聞記者、教員、一般住民と樺太庁を繋げ、また中央の学会との結びつきも試みられていた。内地のように文部省からの補助も適用されず、樺太庁からの支援もない同会を中心に郷土研究が展開されたことは、参加者の職業や活動地域の限定はあるが、この時期の住民の郷土意識をうかがえる事象といえる。また、樺太郷土会の活動停止後も、個人の研究活動や樺太庁博物館による活動は続いており、樺太郷土会はこれらの起点としての位置付けができる。

郷土会の中心人物である菱沼右一の動向については、当時の樺太庁長官、政府の政策との関係を考察した。樺太庁には職員だけではなく教員も所属しており、菱沼のように民間会社の『樺太日日新聞』もその影響を受けている。ただし本稿での検証は十分ではなく、課題としたい。

また、本稿では郷土研究の内容について、新聞・雑誌に掲載された記事や会員個人の研究業績を紹介できなかった。今後、樺太における各分野の研究史として考察したい。

表1 『樺太日日新聞』郷土研究記事

連載時期	回	分類	掲載面	表題	執筆者 (記載された肩書)	備考
昭和4年9月～10月25日	13	歴史	3	四十年前の南樺太 露国文豪チエホフのサハリン紀行		文献欄のタイトル記載なし
昭和4年9月25日～10月2日	7	地名	1	『樺太』の名称の変遷と其の由来		題は3回から『樺太』の名称のみ
昭和4年10月20日(2回)～10月31日	11	歴史	1	樺太に関する地図の種々相		欠号の10月19日に初回掲載か
昭和4年10月3日～10月12日	9	歴史	1	樺太探検者とその年代の研究		欠号の10月13日に最終回「10」掲載か
昭和4年10月16日～17日	2	歴史	1	海馬島発見記		
昭和4年10月10日～15日	5	歴史	1	知取町史の第一頁		
昭和4年10月14日～15日	2	歴史	1	外国人にして樺太を探検せる人々		欠号の10月14日に「上」掲載
昭和4年10月15日(2回)～31日	11	地名	1	樺太の地名の意義と内地の地名	菱沼右一	欠号の10月14日に初回掲載、不定期連載
昭和4年10月24日～29日	5	歴史	3	樺太探検史稿補遺	外崎覚	談話記事
昭和4年10月30日～31日	2	先住民	1	伝説の土人の起源	原著者・目賀田帯刀	現代語訳
昭和4年10月30日～12月12日	21	先住民	3	アイヌ語辞典		2回から「日愛語対照」、9回から「アイヌ語研究」に改題
昭和4年10月31日～11月9日	9	歴史	1	川西幸八翁の昔語り	川西幸八	
昭和4年11月1日～13日	12	旧記	1	東ダッタン紀行記	原著者・間宮林蔵	
昭和4年11月1日～2日	2	先住民	3	土人の伝説 多来加戦争	原著者・中目覚	
昭和4年11月6日～9日	4	先住民	3	土人の伝説 不思議な海		「エ、レツプの口述から」
昭和4年11月16日～26日	9	旧記	1	今から百二十七年前樺太の国勢調査		
昭和4年11月27日～12月12日	11	歴史	1	蝦夷松前藩の樺太経営方法		『福山五百年史』から転載の「松前藩の年表」が添えられ、21日まで掲載
昭和4年12月11日～5年3月12日	42	歴史	1	口碑に残る樺太古跡物語	原著者・山野天海	大正4年から5年にかけて『樺日』で連載された「口碑に遺る樺太古跡譚」の再掲載
昭和4年12月13日～19日	26	旧記	1	江戸末期頃の樺太島の状況 鈴木茶溪の樺太日記	原著者・鈴木茶溪	原著『唐太日記』、欠号の12月20日に最終回「27」掲載か
昭和5年1月13日(2回)～2月20日	15	先住民	3	樺太アイヌ語集		
昭和5年1月21日～2月7日	15	旧記	1	松浦竹四郎の北蝦夷余誌	原著者・松浦武四郎	
昭和5年2月8日～6月1日	92	旧記	1	韋庵岡本監輔の柯太探検記	原著者・岡本監輔	『岡本氏自伝』からの転載
昭和5年3月14日～27日	5	先住民	3	アイヌの社会 山野天海子の遺稿から	原著者・山野天海	
昭和5年5月6日～11日	6	考古	1	『乙名ヶ丘』はチャシ(砦)か	菱沼右一	
昭和5年5月13日～15日	3	考古	1	『乙名ヶ丘』の一考察	森本有親	
昭和5年5月29日～31日?	3	考古	1	『貝塚』の概説	小田切辰太郎	欠号のため最終回は確認できないが、6月1日には掲載していないため、3回で了か。
昭和5年6月2日～26日	25	歴史	1	丸山作楽傳 血涙の樺太放棄	菱沼右一	6月21日掲載の21回を確認(6月20日まで欠号)
昭和5年6月16日～24日	6	先住民	1	疾病や負傷にアイヌは斯う手当する	葛西猛千代	20日まで欠号のため初回は未確認
昭和5年6月6月27日～8月21日	44	歴史	1	国境を越ぐる外交史上の樺太	菱沼右一	
昭和5年8月14日～20日	5	教育	1	樺太教育年表		
昭和5年8月21日～27日	3	先住民	1	アイヌと文化	伊藤清勝	
昭和5年8月26日～10月17日	37	歴史	1	北蝦夷図説 間宮林蔵口述 秦貞廉編		
昭和5年8月28日	1	先住民	1	アイヌの風俗	伊藤清勝	
昭和5年9月4日～6日	2	先住民	1	アイヌの風俗祭事	伊藤清勝	
昭和5年9月17日～10月5日	14	考古	1	石器時代の樺太と遺跡	森本有親	
昭和5年10月8日～11日	4	自然	1	樺太のツンドラに就て	岡田宜一	
昭和5年10月14日	1	歴史	1	大酋長『揚忠貞』及び『ヤエンコロアイヌ』	小笠原健	
昭和5年10月15日～23日	5	先住民	1	アイヌの熊祭	葛西猛千代	
昭和5年10月22日～29日	6	歴史	1	前人の遺蹟を訪ねて 松田傳十郎の巻	松田清作	
昭和5年10月29日	1	先住民	1	アイヌの犬祭	葛西猛千代	
昭和5年11月1日～6日	4	伝記	1	前人の遺蹟を訪ねて 最上徳内の巻	松田清作	
昭和5年11月1日	1	先住民	1	土人の葬式	葛西猛千代	
昭和5年11月2日	1	先住民	1	アイヌの寶物	葛西猛千代	
昭和5年11月5日～21日	13	考古	1	樺太石器時代 土器の研究	新岡武彦	北大土木専門部生
昭和5年11月7日～19日	9	伝記	1	前人の遺蹟を訪ねて 松川辨之助重明の巻	松田清作	
昭和5年11月20日～12月 日		伝記	1	前人の遺蹟を訪ねて 間宮林蔵の巻	松田清作	
昭和5年11月22日	1	歴史	1	嘉永七年製の樺太地圖	御牧(知取支局)	
昭和5年11月23日	1	先住民	1	アイヌの薬草	葛西猛千代	
昭和5年12月4日～5日	2	考古	1	樺太南部の堅穴に就いて	西鶴定嘉	
昭和5年12月28日	1	先住民	1	亡われ行くアイヌの寶物	葛西猛千代	
昭和6年1月5日～3月19日	51	歴史	1	中川小十郎氏巡視随行記	葛西猛千代	

表1 『樺太日日新聞』郷土研究記事（つづき）

連載時期	回	分類	掲載面	表題	執筆者 (記載された肩書)	備考
昭和6年1月5日～2月8日	25	自然	1	樺太が島になるまで	長船威憲	真岡高等女学校
昭和6年2月11日～3月26日	18	先住民	1	蝦夷、夷、毛人 エゾ、エビス、アイヌ	菱沼右一	
昭和6年3月21日～25日	4	歴史	1	中川小十郎氏巡視随行餘談	葛西猛千代	
昭和6年3月26日～29日	4	考古	1	本斗附近の先住民族遺跡	木村信六	
昭和6年3月27日～29日	3	先住民	1	四五十年前に於けるアイヌ族の防寒家屋 附トイチセ(土の家)	葛西猛千代	
昭和6年5月2日～6日	3	先住民	1	オロック他四土人の調査	尾澤清太郎	
昭和6年4月～8月16日	81	地名	1	アイヌ語と日本の地名	藤原相之助	大正5年発行『日本先住民族史』(仁友社)より転載。欠号の8月19日に最終回「82」掲載か
昭和6年5月7日～10月1日	69	歴史	1	樺太史	谷口英三郎	大正13年発行『樺太殖民政策』から転載
昭和6年8月19日～10月2日		歴史	1	漁業史より見たる樺太		樺太定置網漁業水産組合『樺太と漁業』から転載
昭和6年10月10日～7年7月12日	100	近代	1→2	現代の樺太	福家勇	昭和8年5月に『樺太とはどんな處か』(樺太日日新聞社代理部)と改題して出版
昭和6年10月2日～11月11日	25	歴史	1	文献に現はれた鶴城	松田清作	
昭和6年11月12日～26日	12	教育	2	郷土教育の基礎	片桐榮宏	長浜小学校教員、全島教員研究発表会で報告
昭和6年11月27日～昭和7年2月11日	54	自然	2	西樺太の地形	山崎富傳市	真岡中学校教員、全島教員研究発表会では「郷土地理教材としての西樺太」
昭和7年1月7日～月 日		自然	3	南樺太海産巻貝類	瓜田友衛	
昭和7年2月13日～3月15日	25	歴史	2	文化年間の会津藩の樺太守備	相田泰三	大泊高等女学校教員、全島教員研究発表会で報告
昭和7年3月16日～3月23日	6	自然	2	南樺太、西海岸 小登呂半島の成因	齋藤文雄(鉄道事務所内)	
昭和7年3月24日～4月14日	16	自然	2	南樺太の白亜紀層及第三紀層の層位	黒澤守(理学士)	全島教員研究発表会での表題は「南樺太に於ける白亜紀層と第三紀層との層位関係に就いて」
昭和7年4月15日～5月18日	23	教育	2	本質的郷土教育の考察	川越静雄	泊居小学校教員、全島教員研究発表会での表題は「本質的郷土教育への一考察」
昭和7年5月19日～6月14日	19	教育	2	郷土学習提要	中村勇造	野田小学校、全島教員研究発表会で報告
昭和7年6月16日～7月12日	21	教育	2	合科学習と郷土教育	原子啓	豊原第二小学校、全島教員研究発表会で報告
昭和7年6月16日～9月20日	34	教育	2	郷土教育基礎案	黒田守	殖内川小学校、全島教員研究発表会で報告
昭和7年7月13日～14日	2	歴史	2	樺太文獻論	小川運平	
昭和7年8月11日(12回)～9月20日	32	地理	2	豊原町の都市地理学的考察 一その二三について一	南澤忠雄	豊原第一小学校教員、7月26日から8月10日が欠号のため12回以前を確認できず。

『樺太日日新聞』掲載の郷土研究記事は、北海道大学附属図書館所蔵のマイクロフィルム版(札幌:サンコー, 1986年)から確認した。連載の開始、終了が欠号の場合、前後の記事から推定できるものは補足した。

表2 樺太郷土会 会員名簿

氏 名	所 属
縣 忍	樺太庁長官
岡本保三	樺太庁農林部長
辻本正一	樺太庁内務部長
小豆澤洸	樺太庁長官官房調査課嘱託露語通訳
土井武雄	樺太庁長官官房文書課雇員
住谷爲蔵	樺太庁農林部殖民課臨時雇員
菅原繁蔵	< 幹事 > 樺太庁博物館職員、植物学者
戸田桑治郎	< 幹事 > 豊原高等女学校教諭
森本有親	< 幹事 > 豊原中学校教諭
多聞 肇	豊原高等女学校教諭
古谷 碧	豊原高等女学校教諭
大野東雲	豊原中学校教諭
西鶴定嘉	大泊中学校教諭
村山 正	豊原第三小学校教諭
石雲喜太郎	豊原第三小学校教諭
大武留男	真岡第二小学校教諭
齋藤了雄	栄浜小学校校長
船木鐵太郎	宗仁小学校校長
春日忠孝	並川小学校校長
平野 勇	富内小学校校長
佐沼虎次郎	並川小学校訓導
松田清作	< 幹事 > 樺太日日新聞記者
菱沼右一	樺太日日新聞主筆
島津健一郎	樺太日日新聞記者
小林一雄	樺太日日新聞記者
市川與一郎	元小樽新聞樺太支局長
高田安巳	樺太時事新聞編集長
小田切辰太郎	東京帝国大学栄浜演習林勤務
葛西猛千代	富内郵便局長（元樺太庁巡査部長）
乗富慶之	栄浜村（二級）村長
伴 雄三郎	豊原神社社司
鹽 俊吉	豊原町住民
杉本順庵	栄浜村住民
望月市重	並川村（豊原町郊外）住民
森 稔	並川村（豊原町郊外）住民

『樺太日日新聞』昭和5年12月3～5日付掲載「郷土会員名簿」、『樺太』（樺太社）昭和6年1月号「人名録」から作成。

表3 雑誌『樺太』郷土研究記事

発行年	巻	タイトル	執筆者(実名補足)	所属
昭和5年5月	2巻5号	樺太開拓史編纂の急務	藤井尚治	
		悩める農村	菱沼右一	郷土会
		史談 サガレン紀行から	松田臥牛(松田清作)	郷土会
		史談 樺太の囚人生活	太宰俊夫	郷土会
昭和5年6月	2巻6号	史料 二十二年前の樺太	葛西猛千代	郷土会
昭和5年7月	2巻7号	茶溪の樺太日記に出た植物	小田切生(辰太郎)	郷土会
昭和5年8月	2巻8号	開拓先駆者座談会		
昭和5年9月	2巻9号	郷土研究 史跡「白主」	長船威憲	教育会
		郷土研究 樺太のツンドラに就て	岡田宜一	郷土会
		郷土研究 露領時代の樺太殖民政策	齋藤直土	郷土会
		郷土研究 二十二年前の樺太	葛西猛千代	郷土会
昭和5年10月	2巻10号	樺太探検史略	西尾誠	教育会
		本島動植物の分布及生態概要	岡田宜一	教育会
		郷土研究 二十二年前の樺太	葛西猛千代	郷土会
		「アイヌ語」研究から	松田臥牛(松田清作)	郷土会
昭和5年11月	2巻11号	郷土研究 樺太の樺属に就いて	菅原繁蔵	郷土会
		郷土研究 等々力中将の樺太従軍談 1	松田清作	郷土会
		郷土研究 アイヌの習慣	葛西猛千代	郷土会
		郷土研究 樺太郷土会を続ける人々	臥牛生(松田清作)	郷土会
昭和5年12月	2巻12号	郷土研究 毬藻	岡田寧處(岡田宜一)	教育会
		郷土研究 樺太郷土会を続ける人々	臥牛生(松田清作)	郷土会
		郷土研究 アイヌの漁業	葛西猛千代	郷土会
		郷土研究 樺鉄沿線廻り	菊池生	
		郷土研究 等々力中将樺太従軍談	松田清作	郷土会
		郷土研究 シャモの語源に就て		
		悲惨を極めた露国帝政時代の囚人生活	太宰俊夫	郷土会
昭和6年2月	3巻2号	郷土研究 延齡草と水芭蕉	小田切生(辰太郎)	郷土会
		郷土研究 本島に於けるゲレンデスキーの発達を望む	岡田寧處(岡田宜一)	教育会
		郷土研究 豊原を中止とした名所旧跡	松田臥牛(松田清作)	郷土会
		郷土研究 アイヌが火に対する信念	葛西猛千代	郷土会
		郷土研究 樺鉄沿線廻り	菊池生	
		郷土研究 シャモの語源に就て		
		悲惨を極めた露国帝政時代の囚人生活	太宰俊夫	郷土会
昭和6年4月	3巻4号	ボドゾールとは	小田切辰太郎	郷土会
		ハイマート 「蝦夷拾遺」に書かれた『カラフト』	小田切生(辰太郎)	郷土会
		ハイマート 富内村のアイヌの竪穴に就て	葛西猛千代	郷土会
		ハイマート 碧海桑田の感	吉松白自居	
		ハイマート アイヌのメノコの語源		
昭和6年6月	3巻6号	樺太南半の植物界	菅原繁蔵	郷土会
昭和6年7月	3巻7号	アイヌ民族名	葛西猛千代	郷土会
昭和6年8月	3巻8号	文政年間漫録とフロシヤ人	東條九郎	
昭和6年12月	3巻12号	長岡藩士樺太探検秘聞	黒龍迂人(藤井尚治)	
昭和7年3月	4巻3号	アイヌと日本の歴史地理	黒龍迂人(藤井尚治)	
昭和7年5月	4巻5号	史料 樺太出土の石器	藤井黒龍(藤井尚治)	
昭和7年7月	4巻7号	史実物語 十字架を負ったアイヌの彼	葛西猛千代	郷土会
昭和7年9月	4巻9号	アイヌ語と内地の地名 アイヌ語から出た姓	黒龍迂人(藤井尚治)	
昭和7年11月	4巻11号	アイヌ語と内地の地名	黒龍迂人(藤井尚治)	
昭和8年1月	5巻1号	アイヌ語と内地の地名	黒龍迂人(藤井尚治)	
		樺太郷土研究漫談	黒龍迂人(藤井尚治)	
昭和8年2月	5巻2号	樺太郷土研究資料 クルーセンテルンの	黒龍迂人(藤井尚治)	
		樺太攻略の陰謀		
昭和8年9月	5巻9号	北海道原始文化展覧会を観るの記	木村信六	

表4 雑誌『樺太』郷土研究記事

発行年	巻	タイトル	執筆者
昭和9年9月号	6巻9号	樺太地名考	菱沼右一
昭和9年10月号	6巻10号	樺太地名の発生 樺太旧記目録解説	福家勇 土井武雄
昭和9年11月号	6巻11号	生ける樺太渡航一番乗 楠溪懐古雑記 樺太旧記目録解説	熊谷堅蔵 松田清作 土井武雄
昭和9年12月号	6巻12号	樺太渡航一番乗 楠溪懐古雑記 樺太旧記目録解説	熊谷堅蔵 松田清作 土井武雄
昭和10年3月号	7巻3号	趣味の樺太史 ロシヤ人の九春古丹来寇 趣味の樺太史 横井豊山と其一生 趣味の樺太史 楠溪懐古雑記 趣味の樺太史 樺太植物探検の沿革 樺太旧記目録解説	西鶴定嘉 藤井尚治 松田清作 浦本清兵衛 土井武雄
昭和10年5月号	7巻5号	樺太旧記目録解説	土井武雄
昭和10年6月号	7巻6号	樺太地名の発生 樺太旧記目録解説	福家勇 土井武雄
昭和11年3月号	8巻3号	北緯五十度の境界問題 評註・茶溪樺太詩抄 樺太施政三十年史編纂雑記 樺太旧記目録解説	西鶴定嘉 藤井尚治 福家勇 土井武雄
昭和11年4月号	8巻4号	樺太旧記目録解説	土井武雄
昭和11年5月号	8巻5号	樺太旧記目録解説	土井武雄
昭和11年6月号	8巻6号	樺太旧記目録解説	土井武雄
昭和12年1月号	9巻1号	樺太史研究	西鶴定嘉
昭和12年3月号	9巻3号	樺太史研究	西鶴定嘉
昭和12年5月号	9巻5号	樺太史研究 漁業概説 早川寛斎と其晩年	西鶴定嘉 藤井尚治
昭和12年7月号	9巻7号	樺太探検家列伝 最上徳内 菅原繁蔵氏の業績	西鶴定嘉 上田光暉
昭和12年8月号	9巻8号	大槻文彦氏の『大言海』の著書の) 樺太千島交換論 樺太探検家列伝 松田伝十郎 間宮林蔵	藤井尚治 西鶴定嘉
昭和12年9月号	9巻9号	樺太探検家列伝 松浦武二郎 松川弁之助	西鶴定嘉
昭和12年10月号	9巻10号	北方文化と図書館	黒龍迂人 (藤井尚治)
昭和12年11月号	9巻11号	太政官大評定・北地開発秘録	藤井尚治
昭和12年12月号	9巻12号	郷土史談 磯村勝兵衛の卓見	藤井尚治
昭和13年1月号	10巻1号	郷土史談 烈土堀蔵部正伝	藤井尚治
昭和13年4月号	10巻4号	郷土史談 長谷純孝と樺太	藤井尚治
昭和13年5月号	10巻5号	郷土史談 南摩羽峰の樺太生活	藤井尚治
昭和13年6月号	10巻6号	樺太と支那との史的関係 樺太文化とアイヌ語	西鶴定嘉 藤井尚治
昭和13年7月号	10巻7号	チエホフの視た樺太	藤井尚治
昭和13年9月号	10巻9号	郷土史談 樺太割譲と当時の世論	藤井尚治
昭和13年10月号	10巻10号	郷土史談 樺太喪失と琉球獲得	藤井尚治
昭和14年1月号	11巻1号	樺太のギリヤーク人 郷土史譚 トンチと山丹人	服部健 藤井尚治
昭和14年2月号	11巻2号	樺太産田象マンモスの渡来 郷土史譚 樺太に於けるトンチ族	黒沢守 藤井尚治
昭和14年3月号	11巻3号	足蹟にされる石器時代の話 郷土史譚 鯉伝説新考	新岡武彦 藤井尚治
昭和14年4月号	11巻4号	樺太割譲と当時の世論	藤井尚治
昭和14年7月号	11巻7号	複相文化道跡に於ける櫛目土器 嗚呼樺太島 (故河野常吉著)	奥山鎧吉 河野広道公表
昭和14年8月号	11巻8号	嗚呼樺太島	河野広道公表
昭和14年9月号	11巻9号	嗚呼樺太島	河野広道公表
昭和14年10月号	11巻10号	アニワと云ふ名称の由来 嗚呼樺太島	西鶴定嘉 河野広道公表
昭和14年11月号	11巻11号	東多来加道跡を探る 1 戦跡軍川へ 樺太名勝の碑話 回録の功芳者 内山吉太伝 嗚呼樺太島 後編 (河野直吉著)	奥山鎧吉 畑山定治 黒龍迂人 河野広道公表
昭和14年12月号	11巻12号	東多来加道跡 2 日持上人の銅像碑 樺太名勝の碑話	奥山鎧吉 畑山定治
昭和15年2月号	12巻2号	樺太の島 クルウゼンシュテルンの亞庭灣紀行	高橋多蔵 編集部

表 4 雑誌『樺太』郷土研究記事（つづき）

発行年	巻	タイトル	執筆者
昭和 15 年 3 月号	12 巻 3 号	日本語源学とアイヌ語 樺太紀行 クルーゼンシュテルン	藤井尚治
		サハリン島	アントンチェーホフ 太宰俊夫訳
昭和 15 年 4 月号	12 巻 4 号	北緯五十度国境の歴史 サハリン島	木村 慶一 アントンチェーホフ 太宰俊夫訳
昭和 15 年 5 月号	12 巻 5 号	樺太植物最古の文献 雪のツンドラ踏査記 クルウゼンシュテルンの樺太紀行	菅原 繁茂 高橋 多蔵
		サハリン島	アントンチェーホフ 太宰俊夫訳
昭和 15 年 6 月号	12 巻 6 号	サハリン島	アントンチェーホフ 太宰俊夫訳
昭和 15 年 7 月号	12 巻 7 号	物語山岳地名 サハリン島	菱沼 右一 アントンチェーホフ 太宰俊夫訳
昭和 15 年 8 月号	12 巻 8 号	樺太文化の貧相（文化時評） 露兵海馬島を襲撃す（樺太戦争余聞）	荒沢勝太郎 中居照治郎
昭和 15 年 9 月号	12 巻 9 号	サガレンから選ったチェーホフ	荒沢勝太郎
昭和 15 年 10 月号	12 巻 10 号	サハリン島	アントンチェーホフ 太宰俊夫訳
昭和 15 年 11 月号	12 巻 11 号	間宮林蔵と沿海州 国史上からみた沿海州 サハリン島（後編）	西鶴定嘉 藤井尚治 アントンチェーホフ 太宰俊夫訳
昭和 15 年 11 月号	12 巻 11 号	サハリン島（後編）	アントンチェーホフ 太宰俊夫訳
昭和 15 年 12 月号	12 巻 12 号	サハリン島（後編）	アントンチェーホフ 太宰俊夫訳
昭和 16 年 1 月号	13 巻 1 号	座談会 樺太島民性の改造 「臆駭獣」対談記 村井水産課長と伊藤巡查部長に訊く サハリン島（後編）	上田光曜・田中正五郎・中村貫一・大和義郎・佐藤清三郎 村井正雄談 伊藤虎談 アントンチェーホフ 太宰俊夫訳
昭和 16 年 2 月号	13 巻 2 号	北方文化概論 北方文化政策の理念（座談会） 政治の文化的意欲（文化時評） 樺太文化の諸問題 座談会 郷土文化と演劇 樺太の新しい演劇運動 サハリン島（後編）	市川誠一 菅原道太郎・九鬼左馬之助・加藤謙一 新庄成吉 松本憲一・松野朔雄・宮内義治・橋本品・箱崎正夫・田中勇・山口忠春・村元富治・中西竹詞 加藤雄三 アントンチェーホフ 太宰俊夫訳
昭和 16 年 3 月号	13 巻 3 号	樺太伝統建設論 農村文化その他（文化時評） 樺太犬保護論 移住当時の想ひ出 翼賛運動と文化樺太の建設 地方文化と映画（座談会） サハリン島（後編） 戯曲 間宮林蔵	市川誠一 谷川重治 藤島彦夫 鈴木長四郎 岸田国士 今村貞雄・青島順一郎・佐藤光一・菅原道太郎・九鬼左馬之助 アントンチェーホフ 太宰俊夫訳 松野朔雄
昭和 16 年 4 月号	13 巻 4 号	樺太文化の発展性 嘉永六年露寇記 サハリン島（後編）	山路小弥太 宮崎雷八 アントンチェーホフ 太宰俊夫訳
昭和 16 年 5 月号	13 巻 5 号	座談会 国民学校と郷土性 北方文化と樺太 サハリン島（後編）	松本幸市・渡辺信市・新藤基蔵・木村正雄・九鬼左馬之助・菅原道太郎 伊藤緑良 アントンチェーホフ 太宰俊夫訳
昭和 16 年 6 月号	13 巻 6 号	『唐太話』抄 千島の植物調査	宮崎培春 菅原繁蔵
昭和 16 年 7 月号	13 巻 7 号	尊皇心とアイヌ	藤井尚治
昭和 16 年 8 月号	13 巻 8 号	北方文化建設の熱情 最近の樺太をみて 樺太の海豹と海豹狩 図書館と教養 樺太道路物語	河野広道 犬飼哲夫 塩野正三 宮崎雷八
昭和 16 年 9 月号	13 巻 9 号	特集・戦争と樺太文化建設 樺太文化建設論 英雄的民族の宿命と北方文化 北方女性と生活文化 海の樺太史	市川誠一 村山準 皆藤きみ子 宮崎雷八
昭和 16 年 10 月号	13 巻 10 号	座談会 樺太農業の文化史的検討 ウラジミロフカ記 オタスの土人達	高倉新一郎・市川誠一・西鶴定嘉・河辺克・内山四男也・奥山鐘吉・玉貫光一 神代龍彦 河西蒙
昭和 16 年 11 月号	13 巻 11 号	流刑島	B・M・ドロシエヴィチ 太宰俊夫訳
昭和 16 年 12 月号	13 巻 12 号	樺太文化の自覚 昭和十六年の回顧	荒沢勝太郎

表4 雑誌『樺太』郷土研究記事(つづき)

発行年	巻	タイトル	執筆者
昭和17年1月号	14巻1号	樺太のギリヤーク族	エリヤシュテンベルグ 神代龍彦訳
		座談会 若き世代の文化観	木村慶一・松野朔雄・鈴木大二・斎藤隆介・箱崎正夫・長野春樹・新庄成吉・荒沢勝太郎
昭和17年2月号	14巻2号	樺太のギリヤーク	エリヤシュテンベルグ 神代龍彦訳
昭和17年4月号	14巻4号	樺太のギリヤーク族 3	エリヤシュテンベルグ 神代龍彦訳
		石森和男のこと	和田文治郎
昭和17年6月号	14巻6号	座談会 東亜北方圏確立のために	西鶴定嘉・川辺克・市川誠一
		北進論! 先覚者本多利明	樺山銘四郎
		ツンドラ地帯の生活(現地報告)	関口龍嗣
昭和17年7月号	14巻7号	樺太攻略戦の回想	八角三郎
		北方アジアの原住民族	小杉邦太郎
		ツイミ河のギリヤーク	玉貫光一
		樺太占領の裏面史 ポーツマス講和談判の回顧	樺山銘四郎
昭和17年9月号	14巻9号	樺太のギリヤーク族 4	エリヤシュテンベルグ 神代龍彦訳
昭和17年10月号	14巻10号	樺太行政の変遷史	本社調査部
		初代民政長官熊谷喜一郎翁のこと	田中弥十郎
		郡司大尉の勘察加遠征	大山栄志郎
		アリユート人考	藤井尚治
		豊原の読書探訪	塩野正三
昭和17年11月号	14巻11号	国史における北方概念	奥山亮
		北千島の土人達	高倉新一郎
		津軽海峡以北に於ける日本民族の北進線と文化形態との関係	河野広道
		ギリヤークの言語に関する考察	服部健
		北洋の海獣	犬飼哲夫
		樺太の地質学の諸問題	佐々保雄
昭和17年12月号	14巻12号	雪虫(科学随筆)	玉貫光一
		領有直後の樺太農業 南鷹次郎博士の視察復命書から	

表5 『樺太庁報』（樺太時報）郷土研究記事

発行年	巻	タイトル	執筆者
昭和12年11月号	1号	樺太の地名研究	西鶴定嘉
昭和12年12月号	2号	近く落成する樺太庁博物館	樺太庁内務部営繕課
		樺太の地名研究 2	西鶴定嘉
昭和13年2月号	4号	樺太庁博物館	菅原繁蔵
昭和13年3月号	5号	樺太の地名研究 3	西鶴定嘉
		「趣味と科学」樺太の高山植物 1	川島将義
		南樺太に於ける昆虫の特異性	堀松次
		樺太庁立図書館の新設	山本市太郎
		「趣味と科学」樺太の高山植物 2	川島将義
		樺太の地名研究 4	西鶴定嘉
昭和13年4月号	6号	先住民族 オロッコ ギリヤークの生活と風俗	川村秀彌
		「趣味と科学」樺太の高山植物 3	川島将義
昭和13年5月号	7号	「趣味と科学」樺太犬を語る 1	有松志朗
昭和13年6月号	8号	「趣味と科学」樺太犬を語る 2	有松志郎
昭和13年7月号	15号	樺太史の棗	西鶴定嘉
		ツンドラの正体 樺太に果してツンドラありや	菅原道太郎
昭和13年8月号	16号	樺太史の棗 2	西鶴定嘉
昭和13年9月号	17号	樺太史の棗 3	西鶴定嘉
昭和13年10月号	18号	樺太史の棗 4	西鶴定嘉
		樺太犬私見 1	川村秀彌
昭和13年11月号	19号	樺太史の棗 5	西鶴定嘉
		樺太犬私見 2	川村秀彌
昭和13年12月号	20号	樺太史の棗 6	西鶴定嘉
昭和14年1月号	21号	ツンドラ物語（ツンドラの正体続編）	菅原道太郎
		樺太古代の交通路	新岡武彦
		樺太史の棗 7	西鶴定嘉
		兎	高橋多蔵
昭和14年2月号	22号	シュレンクの樺太探検	服部健
		樺太史の棗 8	西鶴定嘉
昭和14年3月号	23号	樺太石器時代の遺跡と遺物概観	木村信六
		樺太史の棗 9	西鶴定嘉
昭和14年4月号	24号	樺太土人の宗教	川村秀彌
		樺太史の棗 10	西鶴定嘉
昭和14年5月号	25号	樺太の蟲	玉貫光一
		樺太史の棗 11	西鶴定嘉
昭和14年6月号	26号	樺太史の棗 12	西鶴定嘉
昭和14年7月号	27号	博物館を見る	編集部
		樺太史の棗 13	西鶴定嘉
昭和14年8月号	28号	「樺太史の棗」を脱稿して	西鶴定嘉
昭和14年9月号	29号	郷土のこと（郷土と文化）	長谷川浩司
		樺太特産の鳥類	高橋多蔵
昭和14年10月号	30号	樺太の建築を見る	山本祐弘
昭和14年11月号	31号	『領有当時の思ひ出を語る』座談会	
		樺太の記念碑と島民性 樺太名勝の碑話四十五集中より	畑山定治
昭和14年12月号	32号	鶴城元会所跡に北邊開拓記念碑を建立	編集部
		第一回開拓功労者讃仰会	樺太庁師範学校
		〔附〕間宮先生東靱探検の意義について	西鶴論議講演概要
昭和15年1月号	33号	紀元二千六百年と樺太開拓の回顧	西鶴定嘉
昭和15年2月号	34号	アイヌの土鎧物語	新岡武彦
		趣味と科学 樺太の大山猫	高橋多蔵
昭和15年5月号	37号	樺太庁博物館の整備	山本利雄
		一新せられたる本島の図書館事業拡充	山本市太郎
		樺太犬に就て 1 主として系統学より見た樺太犬の由来	高橋多蔵
		樺太の伝説 帰り来れど 富内湖中ノ島にまつはる悲話	傳法谷英丸
		樺太の伝説 三つ折れの剣	寛敏彦
		樺太の伝説 未知志湖と白鳥の悲話	北江進
		樺太の伝説 海馬島発見縁起	宮内三郎
		「豊原」と「楠溪」と	藤井尚治

表5 『樺太庁報』(樺太時報) 郷土研究記事(つづき)

発行年	巻	タイトル	執筆者
昭和15年6月号	38号	樺太犬に就いて 2 主として系統学より見た樺太犬の由来	高橋多蔵
		樺太亜寒帯気候に対する一考察	藤田外史
		樺太の伝説 二つの沼物語	筧敏彦
		樺太の伝説 女の子山にまつはる伝説	荒沢勝太郎
		樺太の伝説 海馬島の発見	荒沢勝太郎
		樺太の伝説 オロツコ曾我物語(多来加アイヌとオロツコの闘争)	関口龍嗣
昭和15年7月号	39号	樺太の伝説 二丈岩悲譚	井原朽助
		グラビヤ 樺太の攻略戦の思ひ出	編集部
		樺太古蹟記念日	西鶴定嘉
		南北勢力衝突史上の樺太	高倉新一郎
		岡本監輔を語る	岡本勝
		松浦武四郎の樺太国境問題献白書	松浦武彦
		松浦武四郎について	
		樺太の食用野草	大本氏幹
		占領当時の樺太を顧る コルサコフは焼野ヶ原	扇田彦助
		占領当時の樺太を顧る 酒や石油が凍る寒さ	榊原三郎
		アルチルリリースカヤバーチの思ひ出	石原久助
		燈台の印象 視察船羅州丸に乗って	佐藤まさを
		樺太犬に就いて 3 主として系統学より見た樺太犬の由来	高橋多蔵
		占領秘話 二つの潭(フタラヤバーチ)	傳法谷英丸
昭和15年8月号	40号	懷疑のチェーホフとサガレン島	荒沢勝太郎
		チェーホフの眼(遺稿)	阿部悦郎
		樺太犬に就いて 完 主として系統学より見た樺太犬の由来	高橋多蔵
昭和15年9月号	41号	虎にまつはるギリヤーク民譚	服部健誌(レフ・シュテルンベルク著)
昭和16年4月号	48号	南樺太民譚集 1	服部健
		樺太北知床半島『北舟越』沿革史	新岡武彦
昭和16年5月号	49号	南樺太民譚集 2	服部健
昭和16年6月号	50号	樺太アイヌの「なぐし」物語 樺太アイヌの治療術	和田文治郎
昭和16年7月号	51号	日露戦役あいぬ物語 ※転載	山辺安之助
昭和16年8月号	52号	ギリヤークの伝承と夢判断	服部健
昭和16年9月号	53号	樺太中等学校学術研究会論文 亜庭江湾に於ける鳥類調査	岡田宜一
		樺太中等学校学術研究会論文 樺太地名の研究	西鶴定嘉
昭和16年11月号	54号	樺太中等学校学術研究会論文 東多来加貝塚の考古学的調査	奥山鏡吉
昭和16年12月号	55号	樺太中等学校学術研究会論文 樺太産蜘蛛類 黄金蜘蛛科 生態と分類	吉倉真
昭和17年1月号	56号	樺太中等学校学術研究会論文 南樺太東西両海岸地方に分布する火山岩の噴出時代	黒沢守
昭和17年4月号	58号	郷土考古学者としての木村信六氏とその業績	和田文治郎
		樺太に於けるヤクート及オロツコ族民俗研究資料	樺太庁博物館(山本祐弘調)
		北方民族特集 北方民族素描	箱崎正夫
		北方民族特集 バラトカ 樺太に於けるヤクート族の生活記録	山本祐弘

表3・表4の雑誌『樺太』(樺太社発行)掲載の記事は、北海道大学附属図書館、北海学園大学附属図書館(工学部図書室)、小樽商科大学附属図書館、北海道立図書館の所蔵資料から、表5の『樺太庁報』『樺太時報』(樺太庁発行)掲載の記事は、北海道大学附属図書館の所蔵資料から確認した。また、吉田千萬編『樺太(サハリン)・千島の先住民民族文獻 和文編明治元(1868)～昭和20(1945)年』(1997年)と北海道立図書館ホームページ内蔵書検索(特集情報)を参照した。

Activities and Impacts of the Sakhalin Regional Study Group of the Japanese Territory: Efforts of Local Research by Newspapers and Magazines

Jin SUZUKI

(Doctoral Course Student at Graduate School of Letters, Hokkaido University)

This report examines the formation and development of regional surveys in Sakhalin, Japan, from newspapers and magazines published on this island.

In 1930, in Sakhalin of Japan, a group of local research was born. To form an organization, the editor-in-chief of Karafuto's famous newspaper "Karafuto nichinichi shimbun" is involved. The purpose of this organization was to improve local consciousness of Japanese residents of Sakhalin through research activities.

Various researchers participated in group activities such as history, ethnology and natural science, and the research results were published in newspapers and books. It also cooperates in preserving historical sites, collecting data on museums, and setting up libraries. From the activities of this group, you can know the local consciousness of the Japanese formed in the colony.

The activities of the group will be lost in 1932, but the participating researchers will form individuals and other organizations and continue their research activities. Activities started in 1930 by organizations of regional research have been influential since then.

